セレン姫の結婚

みぎねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セレン姫の結婚

【Ｎコード】
Ｎ６１４１Ｕ

【作者名】
みぎねこ

【あらすじ】
セレン姫の初恋は１０歳の時。
けれど、告白して見事に玉砕。
数年経ち、お年頃のセレン姫に用意された結婚の話。
相手は初恋の彼……ではなくて彼のお兄さん！？

作者のホームページにて同じ作品を掲載してました。

大人になったら結婚しよう！

「私のこと好き？」
私は内心緊張で胸を弾ませながらも、まるで天気でも尋ねるように軽い調子で尋ねた。
そんな問いに相手の男の子は天使のような笑顔で答えた。
「うん、好きだよ」
彼が私のことを好きと言ってくれた！その言葉に私は天にも昇るように喜こぶ。
「じゃあ、大人になったら結婚しよう！クゥが私のところにお嫁においで」
私はありったけの勇気を出して彼にプロポーズした。
その言葉を冗談とでも思ったのだろうか、私の言葉を彼は笑った。
「僕、男だからお嫁さんにはなれないよ」
「じゃあ、私がクゥのところにお嫁にいくから結婚しよう！」
私の言葉に彼は顔をしかめた。
「……」
「私と結婚するのは嫌？」
急に黙り込んでしまった彼に私は恐る恐る尋ねた。
「僕は将来シルバー姫みたいなかわいい女の子と結婚するんだもん」
私は頭をガツンと殴られたようなショックを受けた。
シルバー姫といえば御伽噺の中に出てくるとってもかわいいお姫様だ。
「ねえ、セレは僕の一番の友達だよそれじゃダメなの？」
私はきっと泣きそうな顔にでもなっていたのだろう、彼は慰めるように言ったのだが、私はその言葉に首を横に振った。
「私はクゥが好きだからずっと一緒に居たいんだ。結婚すればずっと一緒に居られるじゃないか。私と結婚したら絶対に幸せにする

よ」
私の言葉に今度は彼が首を横に振った。
「でも、僕はセレとは結婚できない」
「絶対に？」
「絶対に！」
「そっか……わかった……変な事言ってごめん」
私は彼に背を向けるとその場から走り去った。
涙が後から後から溺れ落ちてまるで滝のようだ。
こうして、見事に玉砕して私の初恋は終わったのだった。

久しぶりに懐かしい夢を見た。
私は目元の涙を手で拭いながらぼーっと昔の事を思い出していた。
あれはまだ私が１０歳の頃の事だ。
怪我の治療と言う名目で湯治場で有名なタンタル国に行っていたときに出会った男の子に私は恋をした。
年は私よりも２つ上だったけれど、華奢な体に絹のような金髪、薔薇色の頬に蒼い瞳。
本当に天使のように綺麗でかわいい男の子だった。
それに比べ、あの頃の私はものすごいお転婆でけっしてシルバー姫のようにかわいい女の子じゃなかった。
当時身長も彼とさほど変わらなかったし、口が達者だった私はお姉さんぶって彼を振り回していた。

もう、８年も昔になるんだ。
そんな昔の夢を見て今更泣くなんて馬鹿みたい。
ああ、でもクゥと一緒にすごした日々は楽しかったな。

私が寝起きの頭で思い出にふけっているとノックの音の後に侍女のリンが部屋に入ってきた。
「セレン様、おはようございます」
「おはよう。リン」
今日も一日が始まる。
私は夢も思いでも頭の中から振り払うとベッドを後にした。

アルゴン国。
国土面積はそれほど大きくないけれど、海に面しているため港町として栄えており、山が少なく平野が広がる国土には無数の大河が流れている。
雨季になると治水が大変だが肥沃な大地は作物を作るのに適していて他国に輸出しているほどだ。
大国とまでは行かないけれど、近隣では幅を利かせている国……
それが私の住んでいるこの国。

私の名前はセレン・ネオジム・アルゴン。
本当はもっと長いけれどちょっと省略。
一応アルゴン国でアルゴンを名乗る事を許されている姫の一人。
父親は間違いなくこの国の国王であるダームス王、私のくすんだ赤茶色の髪の色も灰色の瞳の色もおまけにちょっとつり目気味で目つきが悪く見えるところも全部父親似だ。

もし男に生まれていたなら、きっと王の若い頃と鏡に映したようにそっくりになっていたに違いない。
ああ、男に生まれなくてよかった。
王とそっくりになるなんて考えただけでも腹が立つ。

「セレン様、どうかしましたか？」
鏡を睨みつけていたためか、侍女のリンが怪訝そうに尋ねた。
「いいえ、なんでもないわ。それより今日は確かローレン公との約束があったわよね」
「はい、朝礼が終わり次第にお会いする約束です」
リンは私の髪を結い上げながら答える。
彼女は私の幼い頃から使えてくれている侍女で私が一番信頼を置いている人物。
身の回りのこまごまとした侍女の仕事以外にもいろいろと力になってもらっている。

私たちは朝礼が終わった頃を見計らって部屋を出た。

私はもう諦めたのです

「ねえ、リン。最近のタンタル国の情勢は分かりますか」
ローレン公の元へ向かう途中、私に付き従っているリンに何気なくたずねてみたのだが、そんな私にリンは冷たい視線を向けた。
「姫……まだ初恋の君のことが忘れられないのですか？」
リンは八年前の事を知っている。
あの失恋の後、三日三晩泣きつずけて目が開けられないほど瞼がはれた私を慰め世話をしてくれたのは他ならぬこのリンだ。
「ちがっ……違います。今日たまたま昔の夢を見たので気になっただけです」
私の言葉に彼女はわざとらしくため息を付いた。
「夢に見るほど未練があるのですか？いいかげんあきらめたらどうです。どうせ彼の君を手に入れるつもりは無いのでしょう？」
幼少からの長い付き合いのおかげで彼女は主である私にもこのように遠慮ない言葉をぶつける。
「だから違います。本当にちょっと気になっただけなのです」
彼女は私を見てにやりと笑った。
この顔はちょっと意地悪な事を言う顔だ。
……そうして、それを楽しんでいるときの顔。
彼女はちょっと嗜虐趣味の気があると思う。
「信じられませんね。七年前、彼の身元を探るように指示したのは誰です？その後数年、彼の様子を定期的に探らせたのはどこのどなただったでしょうか？」
私はぐっと言葉に詰まった。
まったく、この侍女は傷を抉るように痛いところを付いてくる。
「わかっています、わかっています。王女の権限で調べさせたのは私です……でも、そのおかげで彼のことは四年も前に諦められた

のです」

八年前、彼と私はお互いの身分を知らなかった。
いや、私はあえて彼に自分の身分を明かさなかったの。
当時私は姫と言う立場であまり良い目にあっていなかったので、姫と名乗る事がいやだったから。

彼と出会った場所はタンタル国の湯治場……と言っても、一般庶民が集まるようなところではなくて、貴族達など特権階級の人々が集まる場所だった。
良質の温泉がわいているタンタル国はそのような湯治場をいくつも作り、自国のみならず他国からも人を呼びそれを大きな事業としている。
彼のことはタンタル国の貴族の子どもの一人だと思っていた。
彼もきっと私のことを他国の貴族の子供の一人だと思っていたんだと思う。
二人で遊ぶとき、身分だのなんだのはあまり気にしてなかったので、彼がどこの誰なのかは深く考えていなかった。

失恋した後、彼に一度も会わず自国に帰った私は、後から彼がどこの誰だったのか気になった。
……というか、彼に未練たらたらで彼と会えなくなったぶん、彼のことが少しでも知りたくなったのだ。
そこで、リンに頼んで彼の……クゥの事を調べてもらったのだ。
当時は純粋な子どもの心として彼のことを知りたかった……と言うことにしておいてほしい。
今考えれば、振られたのに彼を調べるなんて彼に知られればしつこい女だと思われて嫌われそうだし、調べらた方は、なんていうか重いし怖いはずだ。

まあ、そのことについては今はおいて置いて、彼の事を調べて分かった事、なんと彼……クゥ……クロムはタンタル国の第二王子だった。

クロム・ルテチ・フランシウム・タンタル
これが彼の名前。
私より2歳年上で、私と違って正妃の息子。第二王位継承者。

この事実を知ったとき、実は私は喜んだ。
王族同士ならば、もしかすると結婚のチャンスがあるかもしれない！と。
初めのうちは政略結婚だろうとなんだろうともし彼と結婚できてずっと一緒に居られるのならそれでもいいと思っていた。
けれども、そのうちに彼が私の父である王のように、自分以外にシルバー姫のようなかわいい姫を娶ってその子ばかりと仲良くしてしまったら、きっと悲しくて悲しくてどうしようもなくなるだろうと言う事に気が付いた。
いや、それどころか、結婚した後も結婚したくなかったとか、言われ厭われでもしたらきっと悲しみで死ぬ事ができるだろう。
と、当時の私は本気で考えていた。
で、まあ、そんなことを考えながら月日が経って成長していくうちに、タンタル国と我が国では国交はあるもののうちの国からタンタル国に嫁ぐメリットが殆どない事を知った。
タンタル国は我が国と比べるまでもなく弱小国で、むしろ我が国に庇護を求めるため向こうからこちらへ誰かが嫁いでくるほうがまだ現実味がある話だった。

そんなこんなで、いろいろと考えつつ過ごしながらも四年前、彼の婚約が決まったと言う情報が私に入った。
それで私はやっとこの恋に区切りをつけた。

……はずなのよ。

「そう、私はもう諦めたのです」

そう力強く言った私の言葉をリンは鼻で笑った。

ちょっとそれ、侍女としてあるまじき行為じゃないの。

ムッとしたが私は言葉に出さなかった。

「その割には、この間いらした彼の君の兄上には興味を持っていましたよね」

「あれは……」

なんでこの侍女はこうも私の心をちくちくと攻撃するのだろうか。

頭が良くって優秀で、護身術の腕も優れていて、長い付き合いで本当は私のことを結構思っていってくれているということを知らなかったら即刻首にしてやるのに。

「確かにこの間の他の国々との方との交流会では興味を持ちましたけれど、あれはあの王子自身に興味を持っただけです。彼の弟とは関係ありません」

「でも、後で「クゥとはぜんぜん違って腹黒そう。笑顔の下で何考えているか分からないから敵にも味方にもしたくない。クゥの話もあまり聞けなかった」と嘆いていらっしゃいましたよね」

「ぐ……」

私は声にならないうめき声を発した。

そんな愚痴零したっけ？

いやだわ、リン相手には口が軽くなりすぎてるのかしら。

「私相手に気を抜くのは結構ですが自分の発言はちゃんと覚えて置いてください。後々自分の首を絞める事になりますよ『炎のセレン姫』」

「……」

ここでその呼び名を出してくるなんて本当にこの侍女ときたら……。

「分かりました、今後は気をつけます」
苦虫を噛み潰したような顔をしてそう告げると、リンは嬉しそうにニッコリと微笑んだ。

嫌なものは嫌なんです

昔、私の父である現国王は『炎の王子』と呼ばれていたらしい。
幼い頃から賢く神童と呼ばれていたのを初めとし、他の兄弟達よりずば抜けた政治の手腕に剣や乗馬などの腕前は人々をひきつけ、そのカリスマ性はものすごいものだったそうよ。
その勢いはまるで燃え上がる炎のよう……うっかり剣を向けようものなら全てを焼き尽くされてしまうと喩えられて、『炎の王子』と呼ばれたのだとか。
もっとましな呼び名は無かったのかしらね。
誰よこんなの考えたの。
本当にセンス悪いわ。

私の母親は側室の一人なのだけれど、もと正妃の侍女だったのを王が手をつけちゃって、私が出来たから側室に向かえいれられたわけ。
正妃に使えられるくらいだから一応貴族の身分ではある。
だから、国王の側室になれない事もないんだけれど、正妃としては自分に仕えていたものに王の寵愛が移るのが面白いはずがない。
しかも、とりあえず子どもができたから後宮に放り込んでおいてそのままにしてくれればいいものを、王は何をとち狂ったのか、母に惚れ込んでしまって正妃やその他もろもろの側室達をまったく相手にしなくなってしまった。
私が生まれた直後はまだ生まれたばかりの子どもかわいさに母を寵愛していると思われてて、そのうち正妃や他の側室達の元に戻るかと思われた王は私が生まれて何年経とうとも母一筋だった。
そんな状態で母が恨まれないわけが無い。
なんだかんだで後宮が荒れだしたのは私が5歳くらいの頃で一番

大荒れに荒れたのが私が１０歳前後だろうか。
母は、よく言えば繊細、悪く言えば精神的に弱い人でそんな後宮の空気に耐えられないような人。
でも、王は母を愛していたから全力で母の事は守った。
後宮とは別の場所に母の部屋を移したりして守った。
母の事は……。
ええ、母だけね、私の事は乳母に任せてそれっきり。
王にとって私は母の付属品で守る価値のあるものじゃなかったのよね。
せめて後宮から隔離してくれればよかったのに、後宮内に放っておかれたものだからこっちはたまったもんじゃなかったわよ。
幼い身に母に対しての恨みを代わりに受けることになった。

物心付いた頃から嫌がらせや陰口は酷かったのだけれど、１０歳の頃、正妃の息子……私の異母兄に命を狙われた。
それを機に、私は周りの私の『敵』だと思ったものに徹底的に反撃する事にした。
遠縁だった、当時宰相に成り立てだったローレン公を半ば無理やり私の後見人にして、王にも母を通じていろいろと権力等を……まあ使えれるようにしてもらい……とりあえず一年ほどで後宮それなりに収める事に成功したの。
それを見て、それまで私を放って置いた王が私に興味を持ったのか、いろいろな事を学ばせてくれたり、国にとって有力な貴族等に会わせてくれる機会をくれた。
その様子と、王に似た私の容姿を見て、「セレン姫は炎の王子に瓜二つ」「もし、男子であったなら次の国王に間違えなかった」なんて噂が流れたおかげで『炎のセレン姫』なんてありがたくも無い呼び名がいつの間にか付いていたのよ。

嬉しくない呼び名だけれども、王位継承権からものすごく遠く、

身分のそれほど高くない母親から生まれた私にとって、その噂と呼び名はいい威嚇になるというか、「居心地のいい場所を作る」のに役立つから利用させてもらっているんだけどね。
だから、人前に出るときはなるべく『炎のセレン姫』のイメージを崩さないように振舞っているんだけれど……

「結婚……ですか」
ローレン公を前に私は必死に動揺を隠していた。
私も一応この国の姫、姫の務めとして他国との政略結婚くらいは覚悟していた。
だから今まで結婚の話が出ていなかったのに、急に結婚の話が出てもそれほど驚く事ではない。
ましてや『炎のセレン姫が』この程度の事でうろたえるなんて事あるはずが無い。
……はずが無いのだが、実際の私は心の中でうろたえていた。
「それで相手が……」
私は回りに悟られないように落ち着いた余裕のある声でいう。
「タンタル国のゼノン王子ですって？」
自分で言いながら、その単語の意味が信じられない。
「タンタル国と言えば、我が国とも割りと国交があって温泉が有名なあのタンタル国ですよね」
私が１０歳の頃に過ごしたあの国。
「ゼノン王子は第一王子であって第一王位継承者でそして……クロム王子という弟君がいるあのゼノン王子ですよね」
クロム王子……クゥ……。
ローレン公は当たり前だと言うように頷いた。

「おことわりします！」
私は叫ぶように言った。
ええい、周りなんか気にするか！
これで落ち着いて居ろっていうほうが無理なのよ。
急に豹変した私の態度にローレン公は目を丸くして驚いた。
「なぜ！？どうしてです！？」
「どうしてもです。嫌なものは嫌なんです」
「しかし、王がもう返事を出して……」
「リン、そこに控えていますか？今すぐキセノン伯爵と連絡を取り彼の私軍を出させなさい。「この間の借りを返してもらう」と言えば断られないでしょう」
「御意」
私はローレン公の言葉を遮ってリンに命令をした。
リンもそれに応えるため、動こうとし、私も出来るだけ手を打つため彼の前から去ろうとしたのだが、私たちの動きは次の彼の言葉で封じられる事になる。
「待ちなさいセレン姫！もう遅いのです。この話は我が国からタンタル国に持ちかけた縁談であって、タンタル国がこれを了承しそれについての返事を出したのです」
「なんですって！？」
私は驚きの声を上げた。
まったくの予想外だ。
うちの国から私を嫁がせる事によって何の利益が出るというのだろう？
いや、それよりも……
「王が私をタンタル国に嫁がせようと計画していたなんて私はまったく知りません。私の情報網にまったく引っ掛かりませんでした」
自惚れるつもりはないが、こんな大きな計画が私の耳に入らなかったことが不思議だった。
私はこの国に私独自の情報網を持っている。

特に城の中での出来事なんて注意して情報を集めている。
それなのに、王がタンタル国に使者を送ったという事すら知らなかった。
「姫、貴方がすばらしい目と耳をお持ちであることは知っておりますが、王はその上を行く駒をいくつも持っているのですよ」
ローレン公は静かに諭すように言う。
王との実力差など比べ物にならないことはわかっていたはずなのに、私は悔しさが沸いてきた。
「私にわざわざ秘密にして事を勧めるなんて王は何を考えているのですか」
声が少しとげとげしくなってしまった。

こんな大事な事は決める前に一言言ってくれれば良いのに。
所詮私は王の手の内の駒の一人。
駒の意見なんかは聞く必要ないって事？
それとも他に何か考えがあるの？

「本当になぜタンタル国なのですか？あの国から我が国へ政略結婚を申し込むならともかく……目的は何です？あの国の特産物と言えば温泉と……鉱山ですか？しかし、あの国の鉱物は質はまあまあ取れる量もまあまあで、今現在の状況で我が国との鉱物をめぐっての取引はそれなりにうまくいっていたと思うのですが」

この国にとってタンタル国からの鉱物の輸入はそんなに重要ではないはず。

「それとも、領土拡大でも考えているのですか？馬鹿馬鹿しい。あれはそんなに愚王ではないと思っていたのですけれど」
王をあれ呼ばわりしたのだけれど、ローレン公まったく気にせずにこう言った。

「いいえ、王はセレン姫のための結婚だと申しておりました」
はぁ？私のための結婚？笑わせないでほしい。
何が悲しくて失恋相手の兄に嫁がなくちゃいけないのよ。
クゥが義弟になったら会う機会も増えちゃうだろうし。
八年前とはいえ、あんな事のあった後で私にどうしろと……。

私は自分の未来を考え気分が重くなった。

説明していただけますか？

私は今、王の執務室で王と対面している。
ローレン公から結婚の話を聞かされた後、その足で王の所へと向かったのだ。
王と謁見の約束をしていなかったので、途中で兵士や側近達の止められたが、舌先三寸で丸め込んで突破してきた。
今の私を止めることは誰にも出来ないわよ。
「説明していただけますか？」
部屋に入り挨拶も主語もなしに出した私の言葉に王は戸惑うことなく答えた。
「あれが望んだからだ」
王の言うあれとは私の母の事だ。
「母が？」
私は顔をしかめた。
母がタンタル国との結婚を望んだのかしら？
いや、そうとは考えにくい。
では、母は何を望んだの？
母は私の結婚を望んだのだろうか？
いや、それも、うーん微妙。

「なぜ結婚なのです？しかもタンタル国」
「お前がこの間の交流会でタンタル国の王子に興味を持っている様子をあれがみかけたらしい」
「……」
とても嫌な予感だする。
私は自分のとった行動を後悔した。
ゼノン王子に近づくんじゃなかった！

「好きな人と結婚して幸せになってほしいというのがあれの願いだ」
なんてこと、まったくもって勘違いよ。
私はあんな王子好きじゃないわよ。
彼がクゥの兄じゃなかったら絶対に近づかなかったんだから。
私が好きなのなクゥなの！
……いいえ、違う違う。
好きだったのがクゥなのよ。
そう、昔好きだっただけで今は別に……そうそう、あくまで過去の事なのよ、うん。
別に今のクゥがどうこうって言うわけじゃなくてね……って、ううん、そんな事はどうでもいいの。
私は頭の中の考えを振り払うように頭を振った。

「まったくの勘違いです。私はゼノン王子と結婚したいなどとこれっぽっちも思っていません」
「そうか」
私の言葉に王はそっけない返事を返す。
「なので、今すぐ話を白紙に戻してください」
「そのつもりは無い」
「なぜです？」
「重要なのはわしがあれの願いをかなえてやるということだ。お前の気持ちなど知らぬ」
このくそじじいが……
私は心の中で悪態を付いた。
まるで当然だろうとでも言うその口ぶりに……本当にそれで当然と思っているのだろうこの男にイライラした気持ちが募る。
本当に母意外はどうでもいいのだこの男は。
最重要事項は母であり母が満足すればそれでよし、事実がどうであろうと関係ないのだ。

このまま王と交渉しても無駄なようね。
別な方向から攻めなくっちゃ。
私はターゲットを変えることにした。
それにしても……
「もし、貴方が愚王だったなら今すぐその首をはねてあげたものを」
私は今の気持ちをそのまま言葉に出した。
この男はこれでも王としては優秀で、今死んだら間違いなく国が荒れてしまう。
苦々しく言い放ったのだが、王は私の言葉を聞いて今までと打って変わって楽しそうな顔をした。
「もし、お前が男だったのなら、間違いなくわしのあとを継がせたものを」
何の冗談よ。
私はたとえ男だったとしても王になんてなりたくありませんからね。

「男だったら今の年まで無事に育ったかどうか怪しいですよ。王が一心に愛を注いでいる寵姫一人息子だなんて、成人する前に周りに事故死か病死をさせられるに違いありません」
もしこの年まで生きれても、私を王にしようと画策する派閥とかが出来そうで嫌だ。
ある意味女でよかったわ。
「周りのやつらは分かっていないな。わしはあれの子どもだからといって優遇はせぬのに」
「ええ、まったくもってその通りですね」
淡々と言う王に私も淡々と言葉を返した。
喩え私が男だったとしても本当に優遇しないのだろう。
なにせこの男はあの後宮に私を放っておいた男。
母の子どもだからと優遇された記憶が無い。

この男が私に目をかけだしたのは私が自らこの男との接触は図ってからだ。

「本当にお前はあれに似ておらぬな」

「あなたの血が強すぎるのですよ。でも、本当にここまであなたに似なくてもよかったのに」

私は自分と同じ色の瞳を睨みつけながら言った。

「あれに似ていたのなら少しはかわいがったものを……おしかったな」

この男は、今の言葉を冗談ではなく本気で言っている。

実の娘にこんな言葉をいうなんて！

なにが「おしかったな」よ！

私だって好きでこんな容姿に生まれたわけではないんですからね！

私は腹が立って一瞬、王の暗殺計画を本気で考えた。

「無駄な事を考えるな。どうせ上手くいかないぞ」

私の心を見透かしたように王はいう。

なによ！なによ！なによ！

そのなんでも分かっていますと言う態度が気に入らないわ！

私は王を睨んでいた瞳さらに怒りを募らせたのだった。

どうして分かってくれないのっ

ぼすん　ぼすん　と何かを叩きつけるような鈍い音が響いている。

「どうして分かってくれないのっ」

私は自室でお気に入りのクッションを殴りつけていた。

事の起こりは一時ほど前。

私は母親のもとを訪ねていた。

「あなたにはあまり母親らしい事ができなかった……あなたには幸せになってほしいの」

それが悲しそうに目を伏せながら俯いた母から出た言葉。

その様子は今にも散ってしまいそうな穢れ無き華のようで娘の私から見ても儚げで美しかった。

美しさの中に見える脆さ、思わず我が手で守りたくなるような、それが叶わぬならいっそ自らの手で手折ってしまいたくなるような、そんなところにきっと父は惹かれたのだろう。

私にはそんなところまったく受け継がれなかったけれどね。

母親らしい事ができなかったと母は言う。

実際娘として、あまり母からの交流が無かったけれど、あの父親との繋ぎをとってもらったり私から頼めばそれなりにお願いを聞い

てくれた。
母親らしいかと言えばちょっと違うかもしれないけれど、私は決して母が嫌いではない。
王は好きじゃないけど。
幸せになってほしいという言葉は正直嬉しい。
私の事を少しでも気にかけていてくれたんだと思えて。
うんうん、私絶対に幸せになって見せるわ。
そのためにいろいろ学んだり、根回ししたり、コネを作ったり……このままいけば近い未来それなりの結果が待ち構えているはずだもの。
具体的にはどこか田舎に屋敷でも買って隠居生活が送りたい。
結婚も出来る事なら愛人とかいっぱい持っている適当な身分の貴族として、何だかんだと理由をつけ、早々と別居して辺鄙なところに引きこもりたい。
王家のどろどろとした内部問題や政治の争いとか無いところで安穏と暮らすのよ。
私それまでがんばるわ！
そんな嬉しさをかみ締めながら決意をしている私に母は爆弾を落とす。

「だから、あなたにはゼノン王子と結婚してもらおうと思って」
「……母上、どうしてそうなるのです？」

だーかーらー、なんでそこでゼノン王子と結婚なのよ。

「女の幸せは好きな人と結婚する事です」

うん、その考えは分かる。
世間一般的に言われている事だもんね。
でもね、『好きな人と結婚』でゼノン王子っていうのは……

「母上、私はゼノン王子の事は好きではないのですが」

むしろ苦手です。

私が好きなのはクゥ……違う違う好き　だ　っ　た　のはよ。

過去形よ過去形！

「セレン……」

今まで俯いていた母が顔を上げた。

その瞳には今まで見た事も無いほどの力強さがこもっている。

「この母の目は誤魔化せませんよ。あなたがゼノン王子を見ている目は恋をしている目でした」

違います

絶対に違います

絶対に絶対に絶対に違います

「母上、それは母上の勘違いです私はゼノン王子の事はちっとも好きではありません」

「いいえ、そんなわけありません」

彼女はきっぱりと言い切った。

そこには弱弱しさや儚さと言うものはまったく無い。

なんなのよその自信は。

「あなたは賢くて周りの事を考えてしまう子です。けれど、国のためなどと考えず自分の好きになった人と結婚していいのですよ」

その言葉、私に結婚したい人がいたならば、とてもありがたいの

だが、残念ながら今現在私にそういった人はいない。
私はあれやこれやと言い訳をして説明したのだが、母は最後まで分かってくれなかった。
やっぱり、クゥの事を話さなかったせいだろうか。

私はついさっきの出来事を思い出して、体の力を抜くようにして大きなため息を吐いた。
クッションを殴るのも飽きた。

「姫様、お茶でも飲んで心を落ち着けてください」

そういって脱力してベッドに寄りかかっていた私にお茶を運んできたのは侍女のコバルトだ。
お茶と一緒にお茶請けも持ってきてくれたようだ。
甘く美味しそうな匂いが部屋に広がる。
「ありがとうルト」
そういうと、コバルトは嬉しそうに微笑んだ。
その微笑で少しささくれ立っていた心が癒される。

彼女はリンの次に私が心を許している人間だ。
リンは私より年上だけれど、コバルトは私より一つ年下。
彼女が１２歳の頃から使えてくれている。

リンは姉のように慕っているところがあるのだけれど、ルトは妹のよにかっわいがっているような感じかかしら。
彼女の可愛いだけではなく、いろいろと優秀なところも気に入っているのだけれど。

「ルト、私がタンタル国に嫁ぐ事になったら付いてきてくれますか？」
出来るだけそれを避けれるようにがんばっては見るけれど、自信ないな。
「もちろんです姫様」
まったく迷いの無い彼女の返事に、私は口元が緩むのを感じた。

シルバー姫と森の魔女

「セレお姉ちゃん、あっちでおままごとしよ」
「セレ姉、この絵本読んで」
「セレ姉ちゃん、俺、自分の名前書けるようになったんだよ、みてみて」

私は一歩部屋に入ると小さな子供達に取り囲まれた。
皆、曇りない瞳をきらきらと輝かせている。
「はぁ〜。癒されるわぁ〜」
私は癒しの中でささくれ立っていた心が穏やかになっていくのを感じていた。

「セレン様は院長先生とお話がありますから遊ぶのはその後ですよ」
「はーい先生」
すみませんと謝られるのを気にしないでくださいと返しながら、私は始終心からの笑顔だった。

ここは城下町にある孤児院。
いろいろと縁あって私はここへ定期的に訪れて寄付をしている。
「――と、いう訳でこちらにはもう来る事はできなくなりました」
院長さんは私の言葉に目を丸くして驚いた後、目じりに皺を寄せ、満面の笑みも浮かべた。

「それはそれは、ご結婚おめでとうございます」
「……ありがとうございます」
私としてはめでたくもなんとも無いのだが、とりあえずお礼の言葉を述べる。
ここでこの結婚は望んでないといっても院長さんを心配させるだけだし。
それは私の望む事ではないから。
あれからいろいろごねてみたりしたのだけれど、結局私の結婚は決まってしまった。
もう後はあれを暗殺するくらいしか手が残されていないわけだけど……
さすがにそれはちょっとねぇ。
リスクが大きすぎるわ。

いや、リスクが無かったらやるかって言われたらそりゃ、やらな……リスクなしか……
絶対に成功してこっちに何も負が無いのなら……
いやいやいやいや、何を考えているの私！
絶対に起こらないもしもの事を考えてもしょうがないものね、うん、この考えは忘れよう。
私は気を取り直して院長さんと向き合った。

「すみませんが、私からの寄付もこれで最後になります。どうぞお納めください」
ちらりとリンに目配せをするとリンがお金の詰まった皮の袋を差し出した。
もうこれで最後の寄付だからいつもより多めに入れておいた。
この孤児院の訪問は私にとって癒しを提供してくれる貴重なものだった。
王宮のどろどろした人間関係に触れた後、ここの子供達と遊んだ

り、勉強を教えたり、一緒に内職したりすると、とてもいい気分転換になるのよ。
子供達は皆、素直で可愛いし、院長も子供達の世話をしている先生も朗らかでいい人たちだ。
もう、ここに通う事もできず、子供達にも会えないと思うと切ない。

「セレン様には本当に良くして頂きました。寄付だけではなく。自活できるようにと子供達でもできるような仕事を紹介していただいたり、裏庭の菜園を整える為に手を貸していただいたり……本当に本当に感謝してもし切れません」
院長はそう言うと深々と頭を下げた。
「どうか頭をお上げください。わずかですが、私がこの院で過ごさせていただいた時間は本当に楽しいものでした。子供達との交流は私に安らぎを与えてくれたのです。私のほうこそ、本当に感謝しています。今日は最後に皆とたくさん遊ぶつもりできたんですよ」
そういって、院長に頭を上げさせた後、私は子供達の元へと足を運んだ。

「セレおねーたん。これ読んでっ」
そう言って差し出された絵本は有名な御伽噺の絵本だった。
その題名を見たとき、私はしばし戸惑ったが、その絵本を受け取ると、読み聞かせをする事にした。

「シルバー姫と森の魔女」
わくわくとした気持ちを宿した幼い瞳が私を見つめている。
そんな様子をほほえましく思いながらも、私は胸の奥がちりりと痛むのを感じた。

「昔々、ある国にシルバー姫と言うお姫様がいました。シルバー姫は白い肌に薔薇色の頬、それに蜂蜜色の髪をもったとても美しいお姫様です。シルバー姫は姿が美しいだけでなく、心も美しいお姫様でした」

身も心も、とても美しいお姫様シルバー姫。

『僕は将来シルバー姫みたいなかわいい女の子と結婚するんだもん』

あの日の言葉が生々しく私の中でよみがえった。

シルバー姫は決して赤毛で体中擦り傷だらけでおてんばな女の子なんかではない。

「シルバー姫のお城の近くの森には悪い魔女が住んでいました。魔女は姿も心も醜く、いつもシルバー姫の事を妬んでいました」

シルバー姫とは反対な醜い魔女。

彼女は自分が持っていない物を持っているシルバー姫を妬み憎んでいるの。

……私みたいにシルバー姫のようになりたいと無いものねだりをしていのだ。

「ある日、シルバー姫が隣の国の王子と結婚する事になりました」

シルバー姫と結婚するのはとても賢く勇敢な王子様。

美しくって性格も良いシルバー姫は皆から好かれている。

もちろん王子様からも。

「魔女は魔法を使って姫を森の奥へと隠し、姫に変装して王子様の元へといきました」

姿を偽り、優しい姫を装って王子の元に行った魔女。
けれども魔女はこの後王子に姿を見破られてしまう。

姫に変装しても所詮魔女は魔女。
変装は次第に解けていき、偽っていた性格もぼろが出てきてしまう。

最後に王子は魔女を倒し、シルバー姫を森から助けて物語りはめでたしめでたしで終わる。

絵本を読み終わった私は大きなため息を付いた。
シルバー姫の話は結婚して「めでたしめでたし」で終わっている。
けれど、シルバー姫で無い私には結婚で「めでたしめでたし」はやってくるのだろうか……。

死なない程度には大丈夫

あっという間に日は過ぎて。

私は今、タンタル国に向かう馬車の中で屍のようにだらりとだらけていた。

ただ今疲労困憊中。

馬車のゆれが心地いい。

さすが、金に物を言わせて作った馬車。

そんじょそこらの馬車と違って揺れ防止も内装も最新式の一級品を使っているだけあるわ。

「セレン様、大丈夫ですか？」

「死なない程度には大丈夫」

おろおろしながら声をかけてきた新入り侍女に私は端的に答えた。

なぜ私がこんなにも疲れているかといえば、国を立つ前にいろいろな……本当にいろいろな面倒ごとを片付けたから。

私独自に雇っていた情報員を解雇して次の就職先を紹介したり、いつか使おうと思っていた一部の気に入らない貴族の裏情報を王に売りつけたり、嫁ぐに当たって一緒に連れて行く信用できる侍女を選別したり……。

人に任せても良いような雑務だけれど、私はなるべく自分の手で済ませた。

とくに、侍女の選別は念入りに。

その時、一部新しく侍女を雇ったのだけれど、先ほど私に声をかけたテルルもその一人。

テルル……テルーって私は呼んでるんだけれど、彼女はあの孤児院で暮らしていた女の子。

今年１５歳になるから、そろそろ就職先を探していたんだけれど、私が国外に嫁ぐと知ったとき、ぜひ侍女になって一緒に行きたいと申し出た。
孤児院にいる間はテルーにとって私は「セレンお姉ちゃん」だったのだけれど、私の侍女になると私と彼女は主従関係になる。
それでもいいかと問うといいと返事してくれたので、彼女は今ここにいる。

まあ、主従関係になったといっても、私の中では彼女は孤児院にいるたくさんいる弟妹達の一人には違いないと思っているのだけれど。

そんな妹の一人が馬車の中で緊張してか落ち着きなくそわそわしている様子を見かけると、少しでも緊張を解いてあげようと思うのが姉心であって、私はテルーに話しかけた。

「テルーはタンタル国の事を知っていますか？」
彼女は話しかけられて少し硬い表情のままこちらを見た。
「いいえ、それが、殆ど知らないんです。タンタル国はどのようなところなのでしょうか？」
「そうですね……アルゴン国は主要都市の殆どが海に面していますが、タンタル国は内陸の山が多い国です。そのため、主要産業は温泉による観光事業と鉱物の輸出です。うちの国からだいぶ離れている事もあり、習慣とかいろいろ違っていたはずです」
「習慣ですか？」
「ええ、特に大きなのは食習慣でしょうか。海が無いので当たり前ですが、食卓に海の幸が上がることはまずありません」
へーと言いながら感心しているテルーの顔は少し表情が和らいでいた。
うんうん、この調子で話していけばいいかな。

私は8年前の記憶を手繰り寄せる。
「それから、服装がちょっと違った記憶があります」
「服装？」
「はい、前に訪れたとき、私は子どもだったのですがあの国では成人前の子どもも大人と同じような格好をしていました」
「まあ、そうなのですか？では、普段から女の子もドレスを着たりするのですか？」
「ええ、そうです。でも、子どもの服が大人の服と形が違うと言うのは他国から見ても珍しいらしいです。たいていの国はタンタル国と同じで、アルゴン国のほうが独特なのですよ」
そう言いながら私は過去にあった会話を思い出していた。

『君、どこの国の人？』
『アルゴン国』
『アルゴン国？』
『そう、この国よりだいぶ南に行ったところにある大陸の端の海に面した国』
『変わった格好してるね』
『そう？私の国では子どもは皆こんな感じの服を着てるよ』
『へー……』

出会ったばかりの頃の彼とのたわいの無い会話。
今でもあの時の彼の表情やしぐさが鮮明に思い出せる。
あの時のクゥかわいかったな。

あれから何日も馬車に揺られ、やっとやってきたわよタンタル国！
王城に来たのは初めてだったけれど、なかなか綺麗で素敵なところだ。
これからここに住むのか……何だか実感がわかないわ。

なんて思いつつも私は着いて早々大広間に通されて、今現在しずしずと王座の前へ歩いて行っている。
ここには、この国の貴族達なんかも集められていて、この国で初めの私のお披露目って感じね。

王や周りの貴族達の視線をびしびし感じてちょっと怖いけれど、前を向き胸を張って堂々と、精一杯王女らしく振舞って歩く。
あくまで私のペースで余裕の笑みを浮かべながら。

真ん中には王座に座った王様とその隣に王妃様。
そうして、二人の両脇に居るのは私の夫になるゼノン王子とクゥ……クロム王子。
一歩一歩彼らに近づくにつれ、私の胸はドキドキとその鼓動を速くした。

目の前にクゥがいる。

手の届く場所にクゥがいる。

8年ぶりに目に映ったクゥは、私の知っているクゥではなかった。
そこに居たのは、天使のように可愛らしい華奢な少年ではなく、一人の青年だった。
昔は同じくらいだった身長も、今は確実に彼のほうが高くなっているし、体の線は細めだが、あきらかに大人の男性のものだ。

ああ、でも、近づいて分かった彼の瞳は昔のままの澄んだ色をしている。

そう思った次の瞬間、クゥと目が合い、私の心臓はドキリと大きく跳ね上がった。

ええい！静まれ私の心臓！
ドクドクとものすごい勢いで心臓の鼓動が体中に響いている。
私はなるべくクゥのほうを見ないようにゼノン王子へと視線を向けた。

私が結婚するのはこっち、ゼノン王子なの！
クゥじゃないの！
クゥとは結婚できないの……。

あ、なんかちょっと悲しくなってきた。

なんて事を考えつつも、王座の前まで着いたので、私は腰を折り、頭を下げる。

「顔を上げられよ」

私は王の声に促され頭を上げる。
ぱちりと王の蒼い瞳の視線と私の灰色の瞳の視線が合わさった。
クゥの瞳の色は父親譲りなのね。

そんな事をぼーっと考えていたら、つかつかとゼノン王子が私の前までやってきた。

高い身長にたくましい体、博学で剣の腕も立ち、王子として……

いや、時期国王としてふさわしい威厳に満ちた雰囲気を持ち合わせている彼は類まれなる美貌の持ち主でもある。
各国の姫君の心を惹きつけて止まず彼を一目見た女性は誰もが恋に落ちると言われているとかいないとか。

私としては、あの美しい顔の奥に何か黒いものが潜んでいそうな気がしてならないのだけれど……。
はじめてあった時、私の勘が危険信号を鳴らしていた。

でも……まあ、結婚するのよね～。
意に沿わない結婚ではあるけれど、覚悟を決めて腹をくくるわよ。

いい妻になれるかは分からないけれど、せいぜい、いい王妃にはなれるように努力するわ。

「セレン姫」
耳に心地よい響きの声が私に掛けられた。
「はい」
私は出来るだけ優雅に微笑んで返事をする。
王族同士の結婚に個人の感情をはさんでもしょうがない。
できるだけ彼とは仲良く……穏便にこの先を歩んで生きたい。

なんとか覚悟を決めた私に、この後未来の旦那様は予想外の爆弾発言をかましてくれた。

「すみませんが私はあなたと結婚できません」

へ?

どうして私と結婚できないと？

長旅をしてきたせいで疲れているのかしら？
何か今、幻聴が聞こえたわ。
結婚がどうとかこうとか。

……まさかねぇ。

うん、まさかゼノン王子が私と結婚できないなんていうわけ無いわよねぇ。
きっと自分で思っている以上に疲れているのね私。
なれない旅に、結婚なんて人生の一大イベントを目の前にしてちょっと緊張しちゃったのかな。
ゼノン王子が私と結婚できませんなんて言う幻聴を聞いちゃうなんて。

だって、ほら、結婚を申し込んだ時点で断るならまだしも、嫁入り道具一式引っさげてはるばるやってきた私に、今更結婚できませんなんて普通言わないわよね……。

えっと、ドッキリ？
嫁にきた私を驚かせようと言うお茶目な冗談とか？
あはは、もしそうでも笑えないわよ！

「セレン姫……」

思考の海に現実逃避をしていた私をゼノン王子の声が現実へ引き

上げた。
彼の瞳には真剣な色が宿っている。
冗談を言っている雰囲気ではない。

「何故でしょうか？どうして私と結婚できないと？」

結婚できないと言うのが私の幻聴で無いとしても、簡単に「はい、そうですか。わかりました」と答えるわけにもいかないわよね。
だって国同士のことだから国としての体面もあるし。
私個人では結婚を取りやめる事はできないと思う。
だいたい、私個人でどうにか出来るなら、私はこの場にいないわよ。

そう思い、王子に理由をたずねた時、私は広間中の貴族達がざわついているのにやっと気が付いた。
彼らも王子の発言に驚いているのだ。
どうなっても知らないわよ、これ。

ちらりと国王を見てみれば、平然とした顔をしている。
こちらは元から知っていたのか、それとも、予想していたのか、驚きを隠しているのか……。
私には判断が付かなかった。

「私には心から愛している女性がいるのです」
悲しそうに眉を寄せ、すまなそうな声で言う彼の様子が、ちょっと演技臭く見えるのは、私の心が汚れているせいだろうか？

……へー、だから何？

と言う言葉を何とか飲み込んだ私はえらいと思う。

だってだって、そんなの私の知った事じゃないわよ。

「……その方がいるから私と結婚できないと言うのですか？」

「はい」

迷いの無い簡潔な答え。

ちょっとむっとしたけれど、表情には出さずにすんだと思う。

「その方と私と両方と結婚……どちらかを側室にするということも無理なのですか？」

この場合、普通は私を正室にしてお飾りの王妃にして側室に入れた娘を寵愛するもんじゃないかしら。

国のための結婚と自分のための結婚両方すればいいのよ。

時期国王なんだし、跡取りもそれなりにいた方がいいだろうから、少々女を囲っても誰も文句言わないんじゃない？もちろん私も夫が側室を何人作っても私はかまわない。

まあ、どうしてもその好きな娘の子どもを跡継ぎにしたいなら私が側室になっても良いけれど。

もしそうなったら、アルゴン国の方には私の方から誤魔化しておこう。

いいじゃん側室。

王妃じゃなく、側室になったら後宮に引きこもれそうだし。

「私は生涯彼女一人を妻として、愛していきたいのです」

貴族達のざわめきが一段と大きくなる。

側室になる方向で話を進めようかと思った矢先に、さらりとすご

い事言ったわよこの王子。

なんかもう、好きにしてくださいって感じだ。

勝手にその娘と結婚すればいいじゃない。

でも、なんでそれを今更言うのよ！

えっと、もし私がこのまま結婚せずにアルゴン国へ帰るとしたら、どうなるわけ？

賠償を請求すればいいのかしら。

この結婚に掛けた費用は全部払ってもらうとして、それ上乗せして慰謝料を請求して……。

私が事後処理の事を算段していると、ゼノン王子はまわりの貴族達の方へと目を向けた。

どうしたのかしら？

「サマリ、こちらへ」

ゼノン王子の声と共に、貴族達の群れの中から一人の少女が出てきた。

年は私より少し下くらいだろうか。

白い肌に薔薇色の頬、それに蜂蜜色の髪をもったとても美しい少女。

それはまるで御伽噺の中から飛び出したような……

「シルバー姫」

私の呟きはあまりにも小さかったため、誰の耳にも届く事はなかった。

モト？

私はその少女の靴の先から頭のてっぺんまでなめまわすように見つめた。
姫としてあるまじきはしたない行為だけれど、今はそんな事を考えている余裕は私には無い。

その少女は本当に本当に可愛かった。

蜂蜜のように光沢のある金の髪、雪のように白い肌。
薔薇色の頬にさくらんぼのような唇に華奢な体。
私のように背も高く、どちらかと言えば大柄な体型とは違い、女の私が抱きしめても折れてしまいそうな細い体はまるでお人形のようだ。
フリルやレースをふんだんに使った淡い色のドレスは私なんかが着たらきっと道化師のように見えてしまうのだろうけれど、彼女にはとても似合っていて、まさに御伽噺の中のお姫様のよう。

そんなとても可愛い少女と私の目がバチリと会った。
泉の水のように澄んだ瞳が私を見つめる。
とたん、彼女はびくりと振るえ、大きな瞳を顔から零れ落ちそうなほど見開き、一方後ろへと下がった。
そのか弱そうな様子は、何というかとても庇護欲を刺激されて、つい守ってあげたくなるような気が……

って、あれ？もしかして私が怖がらせちゃった？

睨んだりしたわけじゃないけれど、一心に見つめていたので驚か

せてしまったのかしら。

そんな彼女を私の視線から遮るように、私の視線の先にゼノン王子が割り込んできた。

まるで、私から彼女を守るように。

「彼女はサマリ、私の愛する女性です」

「サマリ……？」

その名を聞いて私は首をかしげた。

サマリと言う名は聞き覚えがある。

でも、まさか……

「サマリ・クリプトン？」

少女の方を覗き込むようにして問うと、彼女は頬を引きつらせながらコクリと頷いた。

その瞬間、私は血が逆流するような錯覚に陥った。

忘れはしないその名前。

サマリ・クリンプトン

だって、だって彼女は！

「あなたは確かク……クロム王子の婚約者のはずでは！？」

私はクゥと言い掛けてクロム王子と慌てて言い直した。

四年前クゥに婚約者が出来た。

その婚約者の名前はサマリ・クリンプトン。

私はその報告を聞いて、本格的にクゥの事をあきらめる事にしたのだ。

未練たらしくクゥの事を調べるのはやめて、もうクゥは過去の初

恋の思い出にする事にしたのだ。

それがなぜ？どうして？
彼女がゼノン王子と結婚？

私はとっさに国王の横に控えているクゥの方を向いた。
すると、その瞬間、クゥと目が合った。
彼はずっと私の方を見ていたのかもしれない。

え？

クゥは……突き刺さるような視線で私を睨みつけていた。

どうして？

なんで私は睨まれているの？

クゥの瞳には8年前には見た事もなかった鋭さが宿っている。
私は、背筋に冷たいものを感じ、彼から視線をそらした。
心臓がバクバクと大きな音を立てて私の動揺を主張している。

何ナノこの状況は？

私は……

「元　婚約者です」
力強いゼノン王子の言葉が耳に届いた。
混乱していた私の頭にその言葉が入ってくるにはしばし時間が掛かる。

「モト？」
搾り出すようにしていった私の言葉にゼノン王子は大きく頷く。
「ええ、今は私のものです」
ゼノン王子の言葉に、私は呆然として彼を見つめる事しかできなかった。

嫌です

「……セレン姫」
名前を呼ばれ私はハッと顔を上げた。
目の前にはゼノン王子とサマリとタンタル国王、王妃、それとクゥがいる。
いいえ、ちがう。
この場には彼らだけしかいない。
私は静かな部屋を見渡して軽く息を吐いた。
あの広間でサマリを紹介された後、周りの貴族達が混乱のためか騒ぎ出し場が騒然として収拾がつかなくなった為、私たちだけ別室に移動してきたのだったわ。

「顔色が優れませんが大丈夫ですか？」

声をかけてきたのは王妃様。
昔のクゥと良く似た眼差しで心配そうにこちらを見ている。
この方が義母になる予定だったのよね。
昔のクゥに似た優しい雰囲気は、もし義母になってもうまくやっていけそう。

……今更そんな事を考えてもしょうがないわね。

「ええ、大丈夫です。少し予定外の事でちょっと驚いてしまっただけです」
私は出来るだけ穏やかに答えた。
本当はちょっと驚いたどころではないのだけれど。
私はうまく微笑んでいるかしら。

「それで、今後の事も含め、詳しく説明していただけるのでしょうか？」

私は一同を見渡し話を切り出す。

とにかく、国に帰るとしても、今すぐ引き返すわけにはいかないのよね。

それなりの理由……大義名分がほしい。

私には落ち度はなかったと、タンタル国が勝手にこの婚姻を破棄したと言うしっかりとした証拠がほしい。

この結婚はいわば国同士の取引。

ここで私がへまをすれば今後のアルゴン国の世評にかかわる。

しっかりしなくっちゃ！　アルゴン国のためにも。

「まあ、先ほど話した通りなのですが」

ゼノン王子がゆっくりと私へと語りかける。

彼から注がれる視線は、私の心の中を読もうとしているようだった。

私はその視線をしっかりと見つめ返す。

「私はサマリの事を愛しているのです。」

「はぁ、そうですか」

私はなんとも間抜けな返答をした。

だって、これくらいしか私に言えることはないし。

ゼノン王子が誰を愛していようと、私の知った事ではないわ。

勝手に愛しちゃってください。

結婚でも何でも勝手にしてください。

ステキな家庭でも築いちゃってください。
私とアルゴン国に関わらない範囲で。
「私は　絶　対　にサマリ以外とは結婚しません」
絶対にの所に力を込め、ゼノン王子は断言した。
いや、うん、それはもう分かったから。
私としては、今後この問題をどう落とし前付けてくれるかが気になっているわけで……。
ゼノン王子の結婚観とかには興味ありませんから。
そんな事を考えながらも、続くゼノン王子の言葉を待っていると、ここで国王が口を開いた。
「ゼノン、お前の言葉に二言は無いな？」
「はい」
国王の言葉はどこか冷たいものを感じた。
あれ？もしかして怒ってる？
対して、ゼノン王子も少し硬い表情で王に返事をした。
王はゼノン王子の今日の発言を事前に知っていたわけじゃないのかしら？
「そうか……では、ゼノン、お前は王位継承権を放棄しろ」
「仰せのままに」
え？
二人の会話に私は内心驚いた。

こんな簡単に王位継承権を放棄とかしていいの？
というか、王位継承権ってそんなに簡単に捨ててもいいものなの？
私は王位継承権から遠く、さらに女なので、王になるなんて、それこそ王家の面々を根こそぎ亡き者にでもしないと無理なようなものだから、王になる事を夢見た事なんて無かった。
けれど、なんだかんだ言ってゼノン王子は第一王子で、きっと将来は王になる事を前提で育てられてきたのだと思う。
それをいとも簡単に……結婚という理由だけで王になるのをやめるの？

私の混乱をよそに、王はクゥの方を向き、さらに言葉を続けた。

「クロムこれからはお前が第一王位継承者だ」
「……はい」
王の言葉にクゥは短く答える。
次に王は私の方を向いた。
そうして、私の瞳をしっかりと見つめながら彼は言った。

「セレン姫、こちらの事情で大変申し訳ないのだが、貴女は時期国王のクロムと結婚していただきたい」

その言葉を聴いて、私は全身が粟立った。
そうして、反射的にこう、答えた。

「嫌です」

いえっ、その、違うんです

いけない、つい本音が出てしまった。
私は青ざめたが、言ってしまった言葉はなかったことにもできず、部屋中にシーンと重い沈黙が広がった。

手のひらに嫌な汗がじわりとわいてくる。
どうしよう！？

だってだって、昔振られた相手に嫁ぐのって嫌じゃない？
しかも、完璧な政略結婚でよ。
相手は私のことが好きじゃないけれど、私はクゥのことが好きなわけで……いえ、好きだった……ああ、もうっ！好きだったの過去形じゃなくて今も好きなのよ。
認めるわ、認めればいいんでしょう！

そう、認めた瞬間、私はなぜか脳裏に長い付き合いの侍女の笑った顔を見た気がした。

私はたぶん今も私はクゥの事が好きなんだわ。
だから私はクゥと結婚したくないのよ。
嫌なのよ。

私は後宮で国王のたくさんの妃を見て育った。
彼女達はほとんどが政略結婚で後宮に迎え入れられた人々だった。
結婚と言う枷をはめられ後宮という籠にとらわれた彼女達は国王中心の世界でしか生きる事を許されない。
彼の寵愛を求める彼女達の中には彼の心をも求める者も居た。

でも、国王の愛したのは私の母だけだったから……
彼の心を……彼からの愛を求めた彼女達はその事に悲しみ、　心を歪ませて　しまった。
私は彼女達のようになりたくない。
だから政略結婚をするなら　私が好きな人　以外としたかったのだ。
喩え私のほかに好きな人が出来ても私が悲しまなくてすむ人。
愛してくれなくても私が傷つかなくてすむ人。
でも、もしもクゥと結婚したら私は望んでしまう。
彼に愛される事を。
彼が私だけを見てくれる事を。
でも、それは無理な話。
だって、クゥが好きなのは私なんかみたいなモノじゃないもの……
長い沈黙を破ったのはクゥだった。
「私が結婚相手では不満ですか？私ではあなたに釣り合わないとでも？」
固まって動けなくなってしまっていた私に、クゥが鋭い視線で睨みながら私に詰め寄った。
「いえっ、その、違うんです」
急に至近距離に来たクゥに私は慌てた。
ちょっ！　近い！近い！！近い！！！
大広間で８年ぶりにクゥを見たときも手の届く近くにいると思っ

たけれど、今度は物理的に、本当に手の届く場所にクゥがいる。

本当にクゥだ……夢にまで見たクゥだ。

私は広間であったようにまたしても鼓動が早くなり、自分の体温が上昇したのを感じた。

やだ、私顔赤くなってないわよね？

8年ぶりにあう初恋の人を目の前にして私は自分でも信じられないくらい胸が高鳴る。

けれど、彼の突き刺すような視線と目が合って私は再び青ざめた。

「あ、あのですね、クロム王子に不満があるとかでは無くてでしてね……私の気持ちの問題と言いますか、あの…その……」

うう、動揺して何だか変な事を口走ってない？

このままじゃいけないわ！

落ち着かなくっちゃ！

そうよ、炎のセレン姫はこんなことくらいで動揺しちゃいけないのよ。

私は心の中で自分に活を入れた。

「すみません。突然の事で少し動揺しているようです」

乱れた呼吸を整えつつ、とりあえず、必殺お姫様スマイルで誤魔化しておこう。

お姫様スマイルとは、自分の本心を隠しつつ、敵意は無いのですよという感情を前面に表した微笑のことである。これはどろどろの人間関係が横行する王宮でとても役立つ技だ。

しかし、これは一歩間違えば胡散臭い微笑みになってしまう。
ちなみに命名したのはリンだったりする。

私のお姫様スマイルはこの国でも通用するだろうか？
どうか通用しますように！

平気、平気。これくらいなんとも無いから

「セレン様、大丈夫ですか？」
心配そうに声をかけるリンに私はベッドの上からひらひらと手を振って答えた。

まったくもって大丈夫じゃないわよ！

私は今、タンタル国王城の私にあてがわれた客室のベッドの上に突っ伏している。
あの、必殺お姫様スマイルを繰り出した後、気まずい空気が少し薄れたので、話の流れは私とクゥが結婚すると言う方向へ進み、結果として、私とクゥの結婚が決まってしまった。
あーあ、何でこんな事になっちゃったんだろう。
本当はクゥとの結婚は避けたかったのよ。
だけど、そんな事言い出せる雰囲気じゃなかったし、だいたい国同士の結婚だから、私が簡単にどうこう出来るものじゃないのよねー。

そんでもって、話し合いは終わり、部屋に通された私は即効でドレスを脱いで部屋着に着替えて、こうしてベッドの上で脱力しているわけ。
本当はドレスのまま何も考えずベッドにダイブしたかったのにリンに容赦なく無理やり脱がされた。
それにしても精神的に疲れたわ。

これからの事を考えると頭が痛いわよ。
もともとの予定では今日から一週間後に結婚式の予定だったのだ

けれど、予定通りいくのかしら？
まずは、ゼノン王子が王位継承権を放棄した事を明確に提示しなくちゃいけないわよね。
タンタル国内で一騒動起きないといいけど。
それから、私とクゥの婚約を発表して、それと同時にゼノン王子とサマリ嬢の婚約も発表もするわよねきっと。
それからそれから……えーっと。

とにかくめんどくさいわ。

私はため息と共に枕に顔をうずめた。

「それで、どうなったんですか？このままアルゴン国へ帰るんですか？」
主の様子に配慮してほうっておいてくれれば良いものの、リンは私に広間を出てからの事を質問した。
まあ、そりゃあ気になるわよね。
帰るなら帰るで準備とかもあるだろうし。
私はぼそぼそとそれに答える。
クゥと結婚しなくちゃいけなくなってしまったことを。

私の説明を聞いてリンはなるほどと頷いた。
「セレン様は視野が狭いですね」
「なっ！」
さらりと言ったリンの言葉に私はムッとした。
何よそれ、今までの話でどうしてそういう言葉が出てくるわけ？
私はベッドに突っ伏した体を起こし、リンを睨んだ。
「セレン様はこれをチャンスとは考えないのですか？この結婚を

機にセレン様の魅力でクロム殿下を魅了するとか」
魅了ってなに！？
リンの言葉に私は絶句した。
「セレン様の身体は世間一般で言うボンキュッボンのナイスバディなのですから妖艶に迫ればたいていの男は落とせるはずです。湯殿のお世話でセレン様の体の隅々まで知っていますが、女の私から見てもよだれモノです。私が保証します。自信を持ってください」
「……変態」
私はリンの言葉に短く返した。
なんか言っている事が親父臭いわよリン……。
「次に着るドレスはとびっきりセクシーなものにしましょう。その胸を武器にしない手はないですから、谷間が見えるように胸元が広くあいたものとか。それか、体のラインがもっとはっきりと見える物もいいですね」
「……ドレス選びはルトとすることにします」
なぜか楽しそうなリンを尻目に、私はこれから先リンにだけはドレス選びをさせない事を心に誓った。
「だいたい、クゥは私みたいなタイプではなくて、シルバー姫のような娘が好きなんです。私では魅了なんて無理なんです。」
「セレン様は頭が固い」
視野が狭いの次は頭が固いってなによ！
口の悪い侍女に私は呆れた視線を送った。
リンはそんな視線を受け流した後、軽く表情をゆがめる。
「それに……後宮に囚われてますね」
ぽつりと言ったリンの言葉に、私はカッと頭に血が上るのを感じた。

「何を言っているのですか！　リンも知っているでしょう？私は後宮に囚われるのが嫌だったからあそこから出たんです」
私は自分が生まれ育った後宮が嫌いだった。
幼い頃から囁かれる陰口も陰惨な嫌がらせも私の足を引っ張り陥れようとする兄姉達も歪んだ妃達の瞳もみんなみんな大嫌いだった。
絶対に彼女達のようになりたくなかった。
だから私は……私は……

「でも、セレン様。あなたは……」

リンが普段見せないような悲しそうな顔を見せたその時、部屋にノックの音が響いた。

ノックの主はルトだった。
彼女が言うには、今晩の夕食を王族の皆様と会食するかこの部屋で一人でとるかというお伺いがきたらしい。
本当は会食に出て未来の旦那様やその家族の方々と交流した方がいいのよねきっと。

でも、何だかいっぱいいっぱいだった私はルトに食事は部屋で取ると答えたのだった。

夕食を食べ、私は今日かいた嫌な汗を湯殿で洗い流している。
この湯殿のお湯は温泉らしい。なんでも、肌を美しくする作用があるとか。
さすが温泉大国タンタル国だわ。
私は手足を大きく伸ばし、ゆったりとお湯に浸かった。

うーん、きもちいい。

温泉と言えば思い出すなぁ。

クゥと遊んでいたあのころの事を。

私がタンタル国に滞在していたのは１０歳の時。

怪我の治療の為、湯治にやってきた……と言っても、当時怪我は殆ど治っていて元気そのものだったのだけれどもね。

ああ、でも、傷跡とかが薄いのは温泉のおかげなのかも。

まあ、とにかくあの時私は怪我の治った元気な子どもだったのよ。

タンタル国で私は温泉につかる以外は割りと自由な時間を過ごせたの。

滞在していた建物の敷地内ならば一人で自由に出歩く事ができたしね。

しかも、特に監視がついていたわけではなかったので、割と敷地外へも簡単に抜け出せたのよ。

生まれて初めてそんな自由な環境におかれた私は毎日毎日外へと遊びに行ったの。

私の滞在していたところは山の中にあって、温泉の水脈に沿って湯を取り込んでいる邸が点在しているような場所だった。

なので、邸の敷地内から出れば自然が溢れていて、私にとって格好の遊び場だったの。

その日も私は森の中で縦横無尽に遊んでいた。

拾った木の枝を剣に見立てて振り回してみたり、木に登って枝から枝へ飛び移ってみたり、拾った木の実を遠くの木めがけて投げて

みたり……。

今考えてみれば、女の子のする遊びじゃないけれど、あのころの私はちょっと……いいえ、ものすごくお転婆で、そういう遊びが大好きだった。

そうして、わざと茂みの中を歩いて遊んでいた私は気がつくと立派な邸の裏手らしきところに着いていた。

そこで私はクゥと出会ったのだ。

クゥはそこで……三人の男の子にボコボコに殴られていた。

うん、あの時は吃驚したわ。

唖然として、暫くその様子を眺めちゃったわよ。

だって、昔のクゥってば全体的に細くてちっちゃくて本当に可愛かったのだけれど、そんな子が殴られていたんだもの。

あれは喧嘩って言うより、一方的に暴力を振るわれている感じだったわ。

大体、3対1で殴り合いなんて卑怯にもほどがある。

で、四人の様子を良く見てみると、三人のうち、殴っているのは二人で残りの一人は少しはなれた所でニヤニヤ笑っていた。

それで、時折殴っている二人に指示を出している感じ。

当時の私は特にそういうのが大嫌いだった。

頭にかっと血が登った私は、そいつが中心になっているリーダー格だと確信すると、その男の子に背後から跳び蹴りをくらわしたの。

あの時の蹴りは我ながら見事だったわ。

不意打ちの攻撃のその男の子は見事にずっこけた。

まあ、蹴りを入れた私も、その男の子と縺れる様に一緒に地面へ転がったのだけれど。

「いっってえ！何するんだ！」

男の子が乱入者の私に罵声を浴びせる。

「三人で一人をいじめるなんて卑怯者！」

私はそう叫ぶと、こっそり両手に地面の砂を握り締めた。

そうして、掴みかかってきた男の子の顔にその砂を叩き付けた。

私の目潰し攻撃に男の子が両手で会を押さえ悲鳴をあげたので、残りの二人はクゥの元から、おろおろと男の子に駆け寄ってくる。

私は慌てて起き上がりそのうちの一人の脛に思いっきり蹴りを入れた。

私の蹴りは見事に命中！

その子も無様の悲鳴をあげて尻餅をついたとたん、私は頭にガツンと衝撃を受けた。

残りの一人に頭を殴られたのだ。

私はよろけて数歩背後に後ずさったけれど、そのまま足に力を入れて地面を蹴ると殴った男の子に飛びついた。

そうして、その男の子の手を思いっきりがぶりと噛み付いた。

ぶちんという嫌な感覚を歯に感じると共に、口の中に血の味が広がる。

私は泣き叫ぶ男の子に振り払われてまたしても地面に転がった。

私は呆然と事の成り行きを見ていた男の子……クゥの腕を掴むとその場から走って逃げた。

さすがにそのまま三人と喧嘩して勝つなんて無理な事だと分かっていたから。

走って走って息が出来なくなるくらい走って、私たちは小川のほとりへと出た。

私は背後からあの男の子たちが追いかけてこないのを確認すると

その場にぺたりと座り込んだ。
クゥも続けて私の隣に座り込む。
改めて間近で見たクゥはあの男の子たちに殴られていたせいか、唇の端が切れて血が出ている。

私はハンカチを取り出し、小川の水に浸してクゥの口元にそっと添えた。
「大丈夫？痛い？」
「君は？君こそ大丈夫！？」
クゥにそう言われ、自分の姿を見ていると、二度も地面を転がったせいで服は汚れていたし、手足にも擦り傷が出来ていた。
「平気、平気。これくらいなんとも無いから」
そう言って私が微笑むと、クゥも柔らかい笑みで微笑み返してくれた。

その後、私たちは友達になったの。

シーンと静まり返った湯の中で、過去を回想していた私は大きなため息を吐き、頭をかかえた。
凶暴すぎるわ、当時の私。
お転婆とかいう可愛いものじゃないわね。
クゥを助けるために必死だったとは言え、限度と言うものがあるというか、何というか。
いくら仲が良かったからって、男の子三人相手に喧嘩するような女の子と結婚したいとは思わないわよねぇ。
そういえば、クゥと遊んだ思い出って殆ど剣術ごっことか木登りとかそんなのが多かったわ……。

今なら、当時クゥが私を振ったのも分かる気がする。

昔の事を考えて、ついつい長湯してしまった私はもう一度大きなため息をついて湯から出たのだった。

……私のこと嫌いになった？

ベッドに入っても私の体は湯から上がったばかりのようにホカホカだった。
それになんだか、いつもより肌がやわらかく滑らかになっている気がする。
これが温泉の効能ってやつかしら。
気持ちが良くって、何だかいい夢が見られそう。
今日は大変な一日だったから、せめていい夢が見たいわ。
そう思いながら、真新しいシーツに顔を埋め、私は眠りへとついたのだった。

夢を見た。

今までの人生の中で一番幸せだった時の夢。

幼い私とクゥは原っぱで小犬の様にじゃれあって遊んでいる。
私たちは一通りじゃれあうと、原っぱに寝転がって葉っぱで汚れたお互いの顔を見てくすくすと笑いあった。
私はクゥといられるだけで楽しかった。

クゥの瞳はきらきらと輝いていてとても綺麗だ。

「クゥの目ってとても綺麗だね」
私の言葉にクゥは驚いたようにその美しい目を見開いた。
「変な事言わないでよ」

「変な事？私はクゥの目が綺麗だと思ったからそう言っただけだよ」

そう言って、私がクゥの瞳を良くみようと彼の顔を覗き込むと、クゥはプイと私から顔をそらした。

「クゥ怒ったの？」

「……」

無言のクゥに私はあせった。

なぜだかクゥは私の言葉が嫌だったようだ。

「えっと、クゥの綺麗なところは目だけじゃないよ。お日様みたいにきらきらした髪も綺麗だし、声もすごくステキだし、それから、剣を構えてる姿勢もすごくカッコイイし、後ね、後ね……」

私はクゥに機嫌を直してもらおうと、思いつく限りクゥの好きなところを並べ立てた。

けれど、クゥは一向にこっちを見てくれない。

私の小さな胸は悲しみで一杯になった。

「……私のこと嫌いになった？」

じわりと涙がにじんできて、視界がぼやける。

けれど、人前で泣くわけにも行かないし、私はグッと涙をこらえた。

「クゥの事、大切な友達だと思っているから、嫌われると悲しい……」

泣いてはいないけれど、私の声は涙声になっていたのだろう。

慌てたように、クゥがやっとこちらを見てくれた。

「怒ってない。嫌いになってない」

ぶっきらぼうな声に、なぜだか赤く染まった顔は彼の怒りを表しているのかもしれないが、返事が返ってきたことに、私は安堵した。

「私はクゥの事大好きだよ。クゥは私のこと好き？」

「……」

私は、僕も好きと言う答えがほしかったのだが、クゥは黙り込んでしまった。

気のせいか、顔がまた一段と赤くなったような？

「もうっ！分かったからあまりそういう事僕に言うな！そういうのは女の子に言えばいいんだよ」

「女の子にも言うよ。男の子でも女の子でも綺麗なものは綺麗だし」

「女の子にも言っているのか……」

「クゥ？」

またしても黙り込んでしまった彼に私は内心焦ったのだが

「よし、向こうの丘まで競争だ！」

唐突に、本当に唐突にクゥはそう言うと、いきなり走り出した。

「え？クゥずるい！まってよ～」

私は慌てて彼を追いかける。

青い空がどこまでも広がっていて、幸せだったときの一日の本の束の間の記憶……。

目を開けると、そこには見慣れない天井が広がっていた。
私は１０歳のセレから１８歳のセレン姫へと戻る。
きっと、この思い出の地に来た事と、昨日の夜クゥとの出会いを回想した事によってこんな夢を見てしまったのだろう。

大切な友達か……。

私、友達宣言をしておきながらクゥに告白して、そんでもって玉砕して友達関係を壊したのよね。
なんていうか、馬鹿だわ私。

……いや、何で寝起き早々自己嫌悪に陥らなくちゃいけないわけよ。
自業自得とはいえ、なんかもう最悪な気分だわ。

「私、クゥとうまく結婚生活を送れるのかしら？」

ポロリとこぼれた私の問いに、答えてくれる人は誰もいなかった。
当たり前よね、この部屋には私一人しかいないんだし、むしろ返事が返ってきたら怖いわ。

私はもそもそとベッドから這い出ると、水差しからコップへ水を移し一気に飲み干した。
冷たい水に、体が内からスッと冷え、私は少し落ち着くことが出来た。

そう言えば……どうしてクゥを褒めたあの時、クゥは怒ったのかしら？

昨日は本当にいにいろんなことがあったわ。

私の結婚相手が変わったり、結婚相手が変わったり、結婚相手が変わったり。

で、一日経って今の私は大変暇をもてあましていた。
たぶん、タンタル国の重鎮たちは大忙しじゃないかしら。
今後の予定がいろいろ変わったものね。
でも、私は結婚するまではお客様扱いで、この国の事に関わるわけにもいかないし、こうやって部屋でじっとしているしかないのよ。
せっかく馬車に缶詰の日々が終わったのに。
誰か、ご機嫌伺いにでも来ないかしら。

「暇～、ひまー、ひ～ま～～～です」

私の訴えは、部屋にいたリンに鼻で笑われた。
むー、何も鼻で笑う事無いじゃない。
のりが悪いわよ。

「長旅の後なんですから、部屋でのんびりして疲れを取ったらどうですか？」

「えー」
リンの提案に私はつまらなそうな声を上げた。
だって、昨日の温泉のおかげか、疲れなんて、すっかりとれちゃったんだもん。
「誰かご機嫌伺いに来るとしても、午後からでしょうね。せめて午前中はおとなしくしていてください」
そんな事いわれても、暇なものは暇なんだもん。
なんか、やけに早起きしちゃったためか、時間がゆっくり進んでいる気がする。

アルゴン国にいたころは、こうやってのんびり過ごすって事あんまり無かったからなー。
うーん、自国だったらやれる事いろいろあるんだけど、しょうがないわ。

私以外の人にお使いでもしてもらいましょう。
何をやってもらおうかしら。
そうね……。

「暇だから、リンは城下に下りて何か面白い情報が無いか探してきてください。私とこの国の結婚について国民感情とか知りたいです。ルトは城内で昨日の事に関する臣下たちの反応や動きを探ってください。ああ、二人とも、あくまで暇つぶし程度で良いですから」

「御意」
「了解しました」

私のこういう指令には慣れているから、了承の返事をすると二人ともサッと動き出した。
うんうん、楽しい情報待ってるわよ。

……と、私は、部屋にいたもう一人の侍女と目が合った。
そういえば、テルーもいたんだわ。
私の部屋の中で控えていたのは今のところリン、ルト、テルーの三人だけ。
この三人が今のところ一番信用できるから。
テルーはまだ情報収集とか、そういう仕事は教えていないし、出来るはずもないのよね。
でも、他の二人が部屋を出て、自分にもなにか仕事を言い渡されるのではないかと期待のこもった目で見ている。
ただ控えているのも侍女の仕事だけれど、せっかくだから、何か教え込もうかしら。

「テルーは私と一緒にこの国の貴族一覧でも覚えましょう。これ、一人でやるより二人でやった方が効率が良いんですよね」
私は、自分の荷物の中から書類の束を引っ張り出した。
この書類にはこの国の主な名家とその構成要員、力関係が書いてある。
あんまり楽しい作業ではないが、やっておいた方が後々便利だろう。
本当はアルゴン国を出る前に終わらせたかったのだけれど、いろいろ忙しくて、後回しにしてしまったのよね。
まあ、でも、これでテルーも一緒に覚えれるから結果的には良かったのよ。うん。

「それ、全部覚えるんですか？」
書類の束を見て、テルーは驚いたように口を開いた。
「ええ、まあ、大まかにですけれどね」
はっきりきっちり覚えるのは今じゃなくて、おいおい覚えていけばいいのだけれど、やっぱり、それなりに情報は仕入れとかないとね。

そういえば、この資料を作らせたのは数ヶ月前で、そうそう力関係なんて変わらないだろうと思っていたのだけれど、第一王子が王位継承権を放棄したら、ちょっと変わるかもしれない。

「現国王の三番目の妹君が降嫁された侯爵」
「モリブデン侯爵」
「北にある大きな温泉施設を領地に持つ伯爵」
「ビスマス伯爵」
「どちらも正解です」
「わ～い、じゃあ、このクッキーもらいますね」
私とテルーはお茶の時間を使って貴族の名前宛クイズをして遊んでいた。
お互いにクイズに答えて正解したらクッキーを食べれるの。
今はもうお昼をだいぶ過ぎた時間なのだけれど、朝からずっとやっているおかげか、お互いの正解率がだいぶ高くなってきた。
テルーったら、なかなか記憶力が良いじゃない。
なんて思っていたら、部屋のドアがノックされた。
テルーは慌てて口の中のクッキーをお茶で無理やり流し込むと、慌ててドアへと飛びついた。
誰かご機嫌伺いにでも来たのかしら？

「あの、セレン様。王妃様が一緒にお庭をお散歩しないかとおっしゃっているそうですがどうしますか？」
私の前に戻ってきてそう告げたテルーに私は大きく頷いた。
「分かりました。外に出る準備をしてください」

王妃様。私はいずれ彼女に立場に立つ事が決まっているのだ。
仲良くなっておいた方が良いに決まってるわ。
私は気合を入れて準備を始めた。

私は別に……

「綺麗……」
私は、目の前の薔薇の群れに感嘆の声を上げた。
王妃様がつれてきてくださったのは城の奥の奥にある薔薇園だった。
赤、黄色、白、薄桃色、と、色とりどりの薔薇が咲いている。
王妃様はその薔薇を自らの手で切り取り、小さな花束を作った。
「はいどうぞ、棘に気をつけてくださいね」
その花束を差し出され、私は慌てて受け取る。
「ありがとうございます」
うわー、すっごく可愛い。
後でテルーに部屋に飾ってもらおう。

優しそうに微笑んでいる王妃様にはまったく邪気がなく、まるで、昔のクゥを見ているようだ。
自然と私も笑みがこぼれる。
しかし、王妃様はすぐさま微笑を消し真剣な表情になった。

「セレン姫、この度の結婚のこと、本当に申し訳ありませんでした」
そう言って王妃様は深々と頭を下げた。
「いえ、そんな、どうか頭を上げてください」
「本当に、ごめんなさい。ゼノンの我が儘のせいで……セレン姫もゼノンとの結婚を楽しみにしていましたでしょうに」
「私は別に……」
決して結婚を楽しみにしていたわけではない。

むしろ、何とかしてこの結婚を回避しようとがんばっていたのだけれど、ここで本当の事を言うほど私は空気の読めない女ではないので黙っていた。
「でもねセレン姫、あの子……クロムにもいい所はたくさんあるのですよ！」
「はぁ……」
なにやらこちらが言葉を挟む間がない迫力の王妃の言葉に、私は気の抜けた返事しかできない。
「確かに、クロムはゼノンと比べると確かにいろいろ劣る所はありますがクロムはとても誠実でゼノンと違ってまっすぐな子です。セレン姫と結婚して王となってもきっとセレン姫の事を……」
クゥに対して熱く語っていた王妃様は、急に言葉を飲み込んだ。

？

どうしたんだろう？

不思議に思い、私は王妃様の視線を追って薔薇園に視線を向けた。
そこに居たのはクゥとサマリ嬢。
私と王妃様のように薔薇園を散策しているのだろうか。
二人は連れ立って歩いている。

と、私はその歩いているクゥの表情に釘付けになった。
そこにあったのは、まるで先ほどの王妃様のように邪気の無い笑顔。
昨日のような鋭い視線なんてまったく無くて、昔よく見たあの笑顔だ！
蕩けるような甘い疼きが私の胸の中に広がった。
ちょ、何なのその笑顔。
ああ！かわいい！かわいすぎる！

今の笑顔を絵に残して部屋に飾っておきたいわ。
誰か！誰か絵師をここに連れて来て！

うう、それより、こっち向かないかしら、あの笑顔で私を見てくれたら幸せで死ねるかも。

心臓がありえないほどバクバク音を立てている。
昨夜、あんな夢を見たせいで、昔のクゥを好きだった気持ちとかもなんだかよみがえってきてたし、それにさらに上乗せするように気持ちが高ぶる。
あれ？もしかしてこれが惚れ直すってやつ？

私がクゥを凝視する中、二人は私たちには気が付かず、そのままその場を立ち去ってしまった。
あー、行っちゃった。
戻ってこないかしら？
もうちょっとあの笑顔を見ていたかった……。

「セレン姫！？」
未練たらしくクゥの去った方を見つめていた私は、王妃様の声にわれに返った。
王妃様の顔は気のせいか青ざめている。
「手が……」
「手？」
王妃様はどうやら薔薇を持っている私の手の方を凝視しているようだ。
王妃様と同じように自分の手へと視線を向けてみると、そこには薔薇を握り締め血が滴っている両手があった。
あー、ついつい興奮して握り締めちゃった。
ちょっと痛いかも。

「大丈夫ですか！？すぐに手当てを！」
青ざめて軽く取り乱している王妃様。
「大丈夫ですから落ち着いてください」
こんなの、なめておけば治るような怪我だ。
そんな事よりも、出来るならクゥを追いかけて行きたいんだけれど。
いや、でも、追いかけて行ってどうこうするわけじゃなくて、影から見ていたい。
またさっきみたいに微笑まないかな～。
なんて事を心の中で考えても、そう口にする分けにも行かず、私は王妃様の侍女さんたちに引っ張られて城の中へと足を運ぶ事となった。

ああ、でも、良いもの見れたわ。
眼福、眼福。

切なくなってきたのです

「で、姫様、話を聞く限り姫様はクロム様の笑顔を見て幸せの絶頂にいたと思われるのですが、どうして落ち込んでいるのですか？」

ベッドの端っこでひざを抱えて座っている私にそういったのは、城下町から帰ってき私の話を聞いたリンだった。

「だって、クゥの笑顔はステキでしたけれど、あの笑顔が私に向けられたものではないと思うと、切なくなってきたのです」

「鈍っ！鈍いです姫様。今頃落ち込んでるんですか？普通、好きな人が元婚約者と逢引している場面を見たら即座に『私と言うものがありながら浮気なんて最低よー！』と叫びながら往復びんたを喰らわせるくらい、するものですよ」

「それは普通ではないと思います」

往復びんたは普通ではないと思うけれど、鈍いという所は否定の仕様が無い。

あの時は、クゥの笑顔しか見えていなかったのよね。

だって、だって、本当にステキだったのだもの。

でも……。

私は大きなため息を一つ付いた。

「たぶん、結婚したら、毎日こんな感じになるんだと思います」

クゥの近くで過ごすとそれだけクゥが人に笑顔を向ける場面に出会うだろう。

その度にこうやって喜んだり落ち込んだりするんだわきっと。

「姫様は一度クロム様とじっくり話し合った方がいいと思いますよ。ついでに悩殺して自分のものにすればいいと思いますよ」

「話し合う……」
真面目な顔をして言ったリンの言葉の後半をわざと聞き流すと私は呟いた。
クゥと話をする……。
昔のように楽しく話が出来るだろうか？
「だいたい、姫様は昔だって嫌われていたわけじゃないんですよ。人は変わるものです。今の姫様だったらクロム様も結婚相手に選んでもいいと思うかもしれないじゃないですか」
そうだろうか？
いやいや、そんな都合のいいことが起こっているわけが無いわよ。
「それに、姫様は昔の事を大変気にしておりますが、当のクロム様は覚えていないかもしれませんよ」
「え？」
私はリンの言葉に唖然とした。
クゥが私のことを覚えてないかもしれない？
そんな事ありえるの？
「姫様にとっては初恋の相手でついでに初プロポーズして盛大に振られたという相手ですが、クロム様にとっては8年前の数ヶ月を一緒に遊んだだけの友人ですからね。最後にちょっと告白されましたが、第二王子のクロム様にとって求婚や恋の駆け引きなんてその後たくさんあったでしょうから、姫様の事は大して記憶に残っていませんよ」
「そんな事はありません！きっとクゥは私のことを覚えています！」
根拠の無い私の反論にリンはにこりと微笑んで言った。
「では、姫様は今まで下心を持って近づいてきた男たちを全部覚えていますか？」
彼女の言葉に私はぐっと声を詰まらせた。
私は別に箱入りのお姫様ではなかったし、積極的に人脈を広げて

いたので、今までにさまざまな男性と知り合う機会があった。
その中で、私の王族という身分につられて、おおっぴらに私に求婚する者やこっそり愛を囁く者、大人の関係を求める者などがいたけれど、そいつらの事なんて、いちいち覚えてなんていない。
末端の姫の私にでさえ擦り寄ってくるものが多かったのだから、クゥにはもっと沢山の求婚者がいたんじゃないかしら。
「まあ、昔遊んだ子供の事を覚えていても、その子が姫様だと気がついていないかもしれませんし」
「……その可能性はあるかもしれませんね」
あの時私は名前を名乗らなかったから、アルゴン国の姫だったとは気がついてない気がする。
でも、私だと分からなくても昔遊んだ私のことは覚えていてほしいな。
だって、あんなに仲良く遊んだんだもの。
楽しくて幸せだったのは私だけじゃないわよね……。

「セレン様。サマリ・クリプトン様からお花が届きました」
ちょっぴり悲しい気分になっていた私にテルーが持ってきたのは薔薇の花束だった。
薔薇……。
薔薇の花を見ると、今日の薔薇園での事が思い出されてちょっといやだ。
気分がずーんと落ち込んできた。
「それから、クロム様からこちらが……」
そう言ってテルーは私にリボンの掛かった箱を差し出した。
え？
クゥから私に贈り物！？

先ほどまで沈んでいた私のテンションは一気に上がった。
どうしよう、クゥから贈り物なんて嬉しすぎる！
私は箱を受け取り、震えるゆびでそっとリボンを解いてみる。
箱の中から出てきたのは花の形をかたどった手のひらサイズの飴細工だった。
花びらの一枚一枚が丁寧に作ってあって、一見本物の花かと見まごうほどだ。
「うわぁ……綺麗」
「飴細工ですか。変わった贈り物ですね」
「姫様、甘いもの好きですものね。良かったじゃないですか。味見してみてはいかがですか？」
味見？
リンの言葉に私は首をかしげた。
食べる？これを？

冗談でしょ？

食べるなんて言語道断よ！これは永久保存しなくては！
だって、クゥからはじめてもらった贈り物なんですもの。
飴細工だから保存場所は日の当たったり、温度が高くなったりする場所じゃない方がいいわよね。
出来れば飾っておきたいけれど、埃なんかが掛かったら、洗うわけにもいかないし、普段は布でも掛けておいて……いえ、いっそのこと箱に入れて厳重にしまっておいて、観賞するときにだけ外に出す方がいいのかも！
でも、でもっ！出来る事ならいつもすぐに見える場所においておきたいわ！
ああ！どうしましょう！！

「セレン様？……セレン様！セレン様ぁ！」

「テルー、今は何を話しかけてもダメですよ。姫様は今自分の世界にトリップしていますから、一見、深刻な事を考えて固まっているように見受けられますが、その実はきっと、どうでも良いような事を必死に考えているだけですから。しばらく放っておきましょう。大丈夫です。そのうち戻ってきます」

飴細工の保存方法を考えるのに一生懸命だった私は侍女二人がこんな会話をしていた事にも気がつかなかった。

婚約者候補？

「城下ではゼノン王子とサマリ嬢の噂で持ちきりですか？」
クゥからもらった飴細工をしまった後、私はリンからの報告を聞いていた。

飴細工はもう一度箱に入れて保管しておく事にしたの。
これが今現在の一番良い保存方法だと思うわ。
できれば、いつでもすぐ見えるように飾りたかったのだけれど、
いい方法思いつかなかった。
何かいい方法が思いつくまでは箱の中で我慢よ。

と、まあ、飴細工のことはとりあえず置いておいて、私はリンの話に首を傾げた。
城下では、あちこちでゼノン王子とサマリ嬢の話で一杯だったと言うのだ。

「はい、どこへ行ってもその話題で一色でしたね。お二人の恋の話から昨日の事までは人々の間で詳細に語られていましたよ」

リンがいうには、ゼノン王子とサマリ嬢の恋物語が面白おかしく人々の間で語られているらしい。
なんでも、大国の姫に見初められたゼノン王子（うちはそんなに大きな国じゃないんだけどな。一応タンタル国よりは大きいけれど）とそのゼノン王子の弟の婚約者であるサマリ嬢との間に芽生えた複雑な恋。（いや、複雑って話でもない気がするわよ）お互いに決められた相手がいるために惹かれあいながらもなかなか本心を口に出来なかった二人が王子の結婚直前になってお互いの気持ちに素直に

なり、何というか、くっついちゃったと言うような話だ。
それで、愛するサマリ嬢のためにゼノン王子は王位継承権も大国の姫（だから、大国じゃないんだってば）との結婚を棒に振ったと……どこかの三文小説かしらと言う内容だけれど、こういう話題……王宮の恋愛スキャンダルの噂は人々の一種の娯楽みたいなもので、面白おかしく尾ひれをつけて語られるもなのよね。
それが真実であろうと無かろうと。
まあ、それで、真実の愛（？）を貫いたゼノン王子とサマリ嬢のロマンスが巷の人々、特に若いお嬢様方に大変受けているらしい。

それにしても、昨日の事ももう噂になっているの？
確かに公式な場であんな事をやらかしたのだから、人々の口伝いに昨日の事が広まってもおかしくは無いのだけれど。
それに、ゼノン王子は見目麗しいので、国民にも人気のある王子らしいから、噂になりやすいというのも分かるわ。
それでもやっぱり……。

「それと、さらに、一人ですが吟遊詩人がすでにこの一連の事を唄にしているのも聴きました」
リンの情報に、私は眉を寄せた。
「その唄には昨日の事も？」
「ええ」
吟遊詩人がもう唄に？
確かに彼らは世間の流行に敏感で、巧みにそれを唄に取り入れるのだけれど、それでも早すぎる気がする。

「昨日の事の話はどの程度事実に沿っていましたか？」
「ほぼ、事実どおりかと。ゼノン王子が姫様との結婚を断り、代わりにクロム王子が姫とご結婚する事になったと……ただし、この話題のメインもあくまでゼノン王子とサマリ様です」

「その内容はやはりゼノン王子とサマリ嬢にとって好意的ですか？」
「はい」
リンの返事を聞いて私は確信した。
何てあからさま過ぎるの。
これは、どう考えたって……。
「誰かが故意に噂をばら撒いてますね」
私の言葉にリンは小さく頷いた。

しばらくすると、ルトがひょっこりと帰ってきた。
「ひたすら混乱しているようです」
彼女が持ってきた報告このような簡潔なものだった。
彼女が帰ってきたのは夕食も食べ終わってのんびりくつろいでいる時。
クゥからの贈り物を箱から出して鑑賞しながら幸せに浸っている時だった。
今まで姿が見えないなーと思っていたけれど、ずっと情報収集していてくれていたのね。
彼女が言うには、この城の侍女さんと仲良くなって話し込んでいたとか。
新しい環境に来て、話し込めるほど人と打ち解けられるとは、さ

すがルトだわ。
ルトは小柄な体に柔和な顔だちをしているから初対面の人間でもあまり警戒されず近づく事ができる。
物腰も柔らかいし、話してみると人懐っこさも兼ね備えているから情報収集にはもってこいなのよね。

「さすがに一日ではあまり詳しい事は探れませんでしたが、皆、一様に驚いているようです」

まあ、そりゃあ、皆驚くわよ。
私も驚いたし。
もし、こうなる前兆があって人々が今の事態を予測していたら驚かなかったかもしれないけれど、皆、私と同じく寝耳に水だったのねきっと。

「上の方の方々の事は分かりませんが、下の方の人々は、セレン様とゼノン王子が結婚すると言う事をまったく疑っていなかったようです」
「……そうですか」

ふむ、予想通りと言うか何というか、やっぱり一日そこそこじゃたいした情報は入ってこないわね。
私は心の中でうんうんと頷いた。
リンが行った城下では異常に噂が出回っていたりして情報がいろいろ飛び交っていたけれど、普通はこんなものよね。

「ああ、ですが、ちょっと小耳に挟んだ話では、昔サマリ様はゼノン王子の婚約者候補だった事があるとか無いとか」
「婚約者候補？」
「ええ、もともとクリプトン家は先代国王の外戚で王家とは縁が

深いのですが、幼少のころよりサマリ様は王子二人と交流があったようです。その中で、そのような話が出たとか出無かったとか」

「へー」

何でそのときにゼノン王子の婚約者にならなかったのかしら。そうしていれば、今こんなことにならなくてすんだのに。

そりゃあ、王太子の結婚相手ともなると国内の誰かと結婚するよりも、私みたいに他国と婚姻関係結んだ方がいろいろと利益があるからそっちの方がお得な気がするけれどもさ。

結局結婚するならば、初めから彼女を選んでほしかったわよ。

ルトの報告を聞きながら、その日のは終わっていった。

さて、夜が明けて、なんだかんだでこの国に来て三日目に突入よ。私としてはそろそろクゥと話をしてみたいんだけどなー。

でも、今って忙しそうな気もするし、うーん。

一応、打診だけでもしてみようかな？

昨日の贈り物のお礼もいいたいし……。

だめもとでクゥに会いたいむねを伝えてもらうようにした。

さて、今日はどうしようかな。

昨日みたいにテルーと時間を潰そうかしら。

なんてぼけーっと一人で考えていたらテルーが慌てて部屋に入ってきた。

「セレン様！セレン様！昼食の意お誘いが入りました」

昼食のお誘い？
え！もしかして！
「誰からですか？」
私は期待に胸を膨らましてテルーに問い返した。
クゥ？クゥなの？
会いたいって言う伝言が届いたのかしら？
やっぱり、結婚するんだからそろそろ会ってもおかしくないものね！
そうよ、いくら忙しかろうと、このまま結婚まで未来の妻に会わなくて言いなんて分けないわ。
ああ、クゥに会ったら何を話そうかしら。
なんて、心の中で盛り上がっていなか、テルーの口から思いもかけない名前が飛び出した。
「サマリ様からのお誘いです」
えっ

あの……大丈夫ですか？

私は今、念入りに身支度を整えている。

いつもより丁寧に、でも決して濃くならないように化粧を施し、ボリュームのある赤毛は高く結い上げて真珠の髪飾りを付ける。

確かこういう内陸の国では真珠とか珊瑚とかそういった海のものは希少価値があるのよね。

うちの国、宝石の出るような土地はないけれど、海産物だけは豊富なの。

赤い髪に白い真珠はよく映えるわ。

ドレスは私の一番のお気に入りのものをまだ片付いていない衣装箱から引っ張り出した。

この国の流行は分からないから全体的にスタンダードで洗練して見えるように注意を払う。

なんたって、私はこの後、あのサマリ嬢と昼食を共にするのだから！

ふふふふ、まさか彼女からお誘いが来るなんて思わなかったわ。

これは宣戦布告と受け取っていいのかしら。

「リン、これでどうでしょう？」

身支度が整ったので、私はそういって私はリンの目の前でくるりと回ってみせた。

「ええ、宜しいのではないでしょうか。」

リンの言葉に満足した私はこっそり心の中で気合を入れた。

ようし！

いざ！決戦よ！

決戦の場は午後の光溢れるテラスだった。

敵の用意した戦場は格式ばったお食事会などではなく、ラフな感じのランチのようね。

テーブルに並べられているのは綺麗にカットされた果物やチーズや野菜の乗ったクラッカーなど、軽食に近いものが多い。

メインの鳥料理も初めから小さく切り分けてあるものがクレープのような生地にくるまれていて、手でつまんでも食べれそうなかんじだわ。

アルゴン国とタンタル国では微妙に国が離れているためか、テーブルマナーがちょっと違う。

テーブルマナーって言うものは相手に不快感を与えないように食事さえすればそれで良いような気もするのだけれど、王族とか貴族とかの間で、こういったテーブルマナーや礼儀作法と言うものは少しでも間違った事をすればすぐに足を引っ張る材料にされる。

せっかく自国出発前に身につけたアルゴン国式テーブルマナーを見せ付けようと思ったのに……まあ、今日のところはまあいいわ。

目の前にいる豊かな金の髪はきらきらと光を反射し、惜しげもなく日の光を浴びている白い肌には染み一つ無い。
見ればみるほど、御伽噺のシルバー姫のイメージそのままだわ。
ただ、その表情は緊張しているのかやや硬い。
「今日はこのような席にお越しいただき、ありがとうございますっ」
あ、噛んだ。
サマリ嬢は言葉だけではなく舌も噛んだのか口元を手で押さえて目に涙を浮かべている。
「はうぅぅ、あ、う、その、失礼しました」
慌てて頭を下げたサマリ嬢はどうしたらそうなるのか分からないけれど、近くにあったグラスをガタンと倒した。
「あぁ！ごめんなさい！」
侍女たちが慌てて集まってその場を片付けているがサマリ嬢は、なんかもう泣きそうな雰囲気だ。
なんて思っていたら、彼女のその大きな瞳にはみるみるうちに涙が浮かび上がってきた。
何か後一押ししたらきっとこの涙は決壊して流れ出すに違いない。
「あの……大丈夫ですか？」
とりあえず、声をかけてみた。
泣かれたらちょっと嫌だな……

「はいっ大丈夫ですっっ」

彼女は元気にそう返事をしたけれど、なんか、いろいろと大丈夫じゃないような気もする。
あ、でも、何度も瞬きをして泣くのは何とか止められたみたい。
けれど、微妙に体がふるふると震えているような……

何？このイキモノ？

サマリ嬢を前にして、失礼だけれど、何だか気が抜けた。
まさかこれ、計算してやっているんじゃないわよね。
こうやって抜けたところを見せて私を油断させるとか？
いや、まさか……うん、それはないわ。
私を前にして緊張しているの？
それとも、これが俗に言う「天然ぼけ」っていう物体かしら？
もしそうだとしたら、初めて遭遇したわ。

決戦……

えーっと、どうしよう。

目の前で固まってしまったサマリ嬢を前に、私はどうしたものかと考え込んだ。

ここは、私が主導権を握ってこの会を進めていった方がよさそうね。
とりあえず、食事会らしく食事でもしようかしら。
「美味しそうなお食事ですねいただいてもいいでしょうか？」
私から食事を催促するのはマナー違反な気がするけれど、この際どうでもいいわ。
とにかく、つつがなくこの会が終わってくれれば。
決戦は出来そうにないから、サマリ嬢の対策についてはまた後で考えましょう。

そう考えて、私はなるべく穏やかに、彼女を怯えさせないように話しかけた。
そうして、そっと両手をフォークとナイフに添えてみる。

「は、はい。どうぞ召し上がってください」

そう言うと、サマリ嬢もフォークとナイフを手にした。
手にしたフォークとナイフがぷるぷると震えている。
この子、振るえ止まらないのかしら？

彼女はそのぷるぷると震えた手で目の前のサラダへと手を伸ばした。
サラダの中身は数種類の豆をドレッシングのよな物で和えたものと、それに添えられている菜が綺麗に盛り合わせてある。
うん、これは美味しそうね。
お豆って好きよ私。
この茶色い豆は見たことないわ、美味しいのかしら？

なんてサマリ嬢の振るえるフォークの先にあるサラダを観察して

いたら、目の前に小さな物体がぴょこんと飛んできた。

これは……豆！？

茶色の美味しそうなお豆が私の目の前にちょこんと鎮座している。

「あああああ！すみません！」

すぐさま聞こえてきた謝罪の声から察するに、どうやら目の前の彼女が緊張の振るえのあまり豆を弾き飛ばしてしまったらしい……って、何でそうなるの！？普通無いわよこんなこと。

豆が飛ぶとかどんなフォーク使いしてるのよ。

あまりにも不思議すぎて、ついついサマリ嬢の顔を見つめてしまった。

なんか、彼女の顔色がものすごく青くなっているんですけど。

それはもうかわいそうなくらいに。

この子、こんなので良く生きてこれたわね……深層の令嬢とかでめったに表に出てこないタイプかしら？

「……あの」

「ご、ごめんなさい！すぐに片付けさせます！」

「ちょっと落ち着いてください」と言おうとしたら、彼女の言葉とガシャーンと言う良く響く音に遮られた。

彼女の両手からフォークとナイフが滑り落ちてお皿に激突したようだ。

サマリ嬢はその場に固まってしまっている

いや、なんかもう、この子はパニック状態におちいてるのか周りがまったく見えてない気がするわ。
ナイフとかフォークをまともに使える状態ではないって感じ……
ええい！ここは無理やり私のペースに巻き込ませてもらうわよ！
とりあえず、食事をするわよ。食事を。
そう決心して、私はサマリ嬢の目を見ながらゆっくりと話しかけた。

「このお料理、我が国あるクレープと言うお菓子に似ていますわ。そのお菓子はこうやって手で掴んで食べるんですよ」
そう言って私はメインの料理を手でひょいと掴んで食べた。
まあ、クレープもこういった場では本当はフォークとナイフを使って食べるんだけど。
「手で……」
サマリ嬢は目を丸くしてこちらを見ている。
「ええ」
むしゃむしゃと咀嚼した後、私は笑顔で答えた。
サマリ嬢もおそるおそるメインの料理に手を伸ばすとぱくりと一口食べた。
口に入れたものを彼女がごくりと飲み込んだのを見計らって私は声をかける。

「美味しいですね、こちらもいただこうかしら」
そう言って私はカットされた果物にも手を伸ばして口に運んだ。
そうして、ここで私はひっさつお姫様スマイルを繰り出しす。
どうやらお姫様スマイルはサマリ嬢に効果があったようで、つられたように彼女も微笑んだ。

そうして、彼女も私のまねをして果物へと手を伸ばした。

べちゃ

……果物がサマリ嬢の手から滑り落ちたわ。

この子、基本的に不器用？

ああ、サマリ嬢、固まっちゃってる。

せっかく食事をしてたのに。

私は彼女が手にした果物と同じものをさっと取ると、手を滑らせて、テーブルへと落とした。

「あっ」

サマリ嬢の小さな驚き声が聞こえた。

「この果物は手だと滑りやすいですね」

そう言って、彼女にお姫様スマイルを向けると、私はテーブルに落ちた果物をフォークで突き刺した。

そうして、何事も無かったように口に入れる。

お行儀が悪いとか、そんな事知りませんよー。

サマリ嬢もフォークを手にすると私と同じようにして果物を口へと運んぶ。

おお、フォークが普通に使えるようになってるわ。

緊張していたのかパニック状態だったのかは知らないけれど、初めの状態からは抜け出せたのね。

「甘くて美味しいですね。この果物、とても気に入ったわ」

そう言って、私は微笑を浮かべる。

今日はお姫様スマイルの大安売りよ！

サマリ嬢は先ほどよりも柔らかく私に微笑み返した。
よしよし、さっきと比べてだいぶ顔色も良くなったし、手も震えていない。
少しは落ち着いたかしら。
彼女も少し余裕が出てきたらだろうから、軽い会話でもしようかしら。

その後、私は彼女を刺激しないように当たり障りの無い会話を繰り返した。
そうしてこの食事会の時間は過ぎていったのだった。

なんだか、むしょうに疲れる食事会だったわ。

今日は一緒に食事をします

「なんでサマリ様のフォローをしたんですか？」
部屋に帰って一息ついてから、サマリ嬢との会食の様子をリンに話すと、こう突っ込まれた。
「……わかりません」
本当に分からないのよねー。
別にあそこまで私がフォローする必要は無かったはずなんだけれどな。
何というか、成り行き？

サマリ嬢。
その存在を知ったのは四年前、クゥの婚約者になったという情報で彼女の存在を知った。
その時、彼女自身のことは調べなかったのだけれど、私の中ではなんとなく御伽噺の中のシルバー姫様のイメージがぼんやりと浮かんでいた。
一昨日はじめて会った彼女は外見はまさにシルバー姫だった。
クゥが結婚したいと言ったシルバー姫……。
八年前、クゥはすでに彼女と結婚するつもりだったのかもしれない。
だからあの時、シルバー姫みたいな女の子と結婚すると言ったのかも。

彼女をどうしたいのか自分でもよく分からないわ。
昼食を食べるまでは彼女と決戦だとか思っていたはず。

テーブルマナーや身のこなしとか、服のセンス、最低口先だけで

もいい、彼女に何かで勝ったと思いたかった。
四年間、私の望む場所にいた彼女。
私は、あの子に私の方がクゥの隣にふさわしいのだという事を認めさせたかった。
クゥにふさわしい……。
ここまで考えて、私は自嘲的な笑いがこみ上げてきた。
クゥにはふさわしいって何よ。
私は自分が王妃にはふさわしいと自信を持っていえる。
けれど、クゥの隣にはふさわしくないかもしれない。
クゥの隣にふさわしいのは、薔薇園で見たような笑顔をクゥに浮かばせる事のできる人よ。
薔薇……。
あれ？何かを忘れているような……
「ああ！！」
「どうしました？」
急に上げた私の叫び声にリンは静かな声で聞き返した。
「薔薇のお礼を言うのを忘れてました」
私としたことが、サマリ嬢自身に気を取られすぎて、薔薇をもらったお礼をいってなかったわ。
次にあったとき……は、もう、タイミング的に遅いわよね。
どうしようかしら……まあ、なにか機会があったらお礼をしましょう。
「ところで、姫様、今晩も王族の方から会食の申し込みがありま

すがどうしますか？」
「今日は一緒に食事をします」
「了解しました」
夜のドレスはどうしようかしら。

目の前には豪華な食事と近々家族となる人たち。
メンバーは、国王に王妃様、ゼノン王子、そうしてクゥ。
食事中の会話は王妃様が中心となって話題を提供して、一応表面上はそれなりに盛り上がりを見せてはいるのだけど……

なんか気まずいのよね。
だいたい、私としては、元婚約者……あれ？婚約もしてなかったんだっけ？まあ、いいわ、元結婚予定者のゼノン王子と現結婚予定者のクゥのこの二人と一緒に席についているっていうのが何だか気まずい。
ゼノン王子とは今更何を話していいのか分からないし、そもそも話したいことがないというか、王子自身にあまり興味がない。
反対にクゥはいろいろと話したいことがあるけれど、何から話していいのか分からないし、できれば二人っきりで話せるようなところで話したい。
なので、この場で話す事と言えば、本当に当たり障りのないありきたりの話ばかり。

出来ればこの後、クゥと二人で話がしたいわ。
どこかで二人きりで。

私は食事の途中から、ほとんどこの後どうやってクゥに話しかけようかと、そればかりを考えていた。

さて、食事も終わり、それぞれが部屋へと引き上げていく。
この時を待っていたわ。
今こそクゥに話しかけるチャンス！

「ク……」
「セレン姫」
クゥに話しかけようとした、まさにその時。
私はゼノン王子に話しかけられた。

ちょっと！邪魔しないでよー！

「何でしょうか？ゼノン王子」
早くどっか行ってよ。
と、思いつつも、そんな事おくびにも出さず私はゼノン王子に向き合う。
ここで本心を出してしまうほど私は非常識な人間じゃないのよ。

そこには、王子として完璧な笑顔をたたえたゼノン王子がいた。
そう言えば、うちの国の交流会でもこんな笑顔をしていたわね。

笑顔の下で何を考えているんだか。

「今日は月が綺麗です。もしよろしければ、我が王宮自慢の薔薇園にでも散歩に……」

薔薇園って、あの王妃様に連れて行ってもらった薔薇園かしら？

って、ちょっと、何で隣に並んでるのよ。

しかも、さりげなく人の腰に手を回してエスコートしようとしてるし。

私はわざと相手にわかるように腰に回された手を払い落とした。

冗談じゃないわ。

誰があなたなんかと夜の散歩なんてするものですか！

そう言うのはサマリ嬢でもさそってください。

私は間に合ってますー。

だいたい、弟の結婚相手を夜の散歩に誘うなんて非常識すぎるわよ。

と、まあ、心の中ではごちゃごちゃ思っているのだけれど、これを実際に声に出して言う分けにも行かず、私は軽く笑みを浮かべながら、嫌味なほど、とても丁寧に散歩をお断りした。

そんなこんなをしているうちに、ああ、クゥが行っちゃった。

ばかばかばかっゼノン王子のばかぁ！

せっかくのチャンスがぁ。

まったく、一昨日きやがれってものよ。

「ではせめて、お部屋まで送らせてください」

何よそれ。
ついてくるなーばかー。
心の中でさらに悪態をつきつつも、やはりそんな事をいう事もできず、私はとりあえずそれを了承した。

ああ、心が荒むわ。

廊下を二人でとぼとぼと歩きながらゼノン王子が話しかけてくる。
「セレン姫、あなたとは一度じっくりとお話したかったのですよ」
「そう……ですか」

私は別に話したくはない。
話すこともない。
そりゃあ、もしも結婚するんだったら話したいこともいっぱいあったのだけれどね。
「まずはもう一度、この度の事で謝罪を」
「……」
歩きながらだけれど頭を下げられて、私はそれを冷い視線で見つめた。
「せめて……この国に来る前に……」
もう少し早くゼノン王子が私と結婚できないと意思表示をしてくれたなら、私はこの国にこなくて済んだのかもしれない。
どうして今更。
私は、彼に対して罵詈雑言を吐きそうになったがそれを飲み込んだ。
「姫？」

私の様子を不審に思ったのか顔を覗き込むようにゼノン王子が私の肩に手を触れてきたのだけれど、私はその手から逃れると軽く頭を横に振った。
「いえ、何でもありません」

ゼノン王子と話しながら、部屋に送ってもらっているとふと気がついた。
あれ？会食に向かうときにこんな廊下は通らなかったはず。
この国に来てほとんど部屋に篭りっきりだったから城内の道なんて分からないし、覚えていないのだけれど、先ほど会食の会場に向かう時の廊下はこんな感じじゃなかった。

「あの、お部屋への道はこちらではないのでは？」
もしかして、この道が近道なのかな？
なんて思いつつも私は尋ねてみた。
「大丈夫、ちゃんと無事に送り届けますから」
ゼノン王子は胡散臭いさわやかな笑顔でそう答えた。

部屋への道じゃないと言う事を否定しないんだ。
へー
ふーん
何考えてるのこの王子様。

「ところでセレン姫。我が国は大国のアルゴン国と比べてだいぶ違って驚かれたのではないですか？」
？？どういう意味？

「大国と呼ばれるほどのものではありませんわ」
言葉の意図がいまいち分からなかったので、とりあえず、私は「大国」と言うところを否定しておいた。

うちの国はそんなに大きくないわよ。

「ご謙遜を……確かに、大国であるキイナ国やカント国比べればたいていの国は小国ですが我が国から見ればアルゴン国は比べようもないほどの大国ですよ」

私の言葉にゼノン王子は少しおどけたような大きなしぐさで答えた。

まあ、この国から比べたらうちの国は大きいかもしれない。

国土も経済面でも確実にうちの方が上だし。

「そんな小国にアルゴン国から姫との結婚の申し出があったときは驚きました」

うん、まあ、そりゃ驚くわよね。

私もいろんな意味で驚いたし。

「……国王が決めた事ですので」

「では、国王はなぜこのような国に？」

「さあ？王の考えは私には分かりかねます」

まさか、私の母の願いをかなえるためです。しかも、全ては母の勘違いなんです。と、答えるわけにもいかず、適当に言葉を濁すと、私はついとゼノン王子から視線をそらした。

「では、あなたは何を思ってこの国へ嫁いでくるのでしょうか？炎のセレン姫」

”炎のセレン姫”と言う言葉に、思わず彼の方に振り向くと、そこにはやけに真剣な目をしたゼノン王子がいた。

何が価値があるかは私が決める事です

『炎のセレン姫』
なんともありがたくない私の渾名。

どうしてこんな自国から遠く離れた地でそんな渾名が出てくるの！？

まさか、こんなところまで私の噂が広がっているとか？
いや、それはないわよね。
うん、ないない。
だって、うちの隣の国とかならまだしも、こんなに離れた国で私なんかが噂になったりするは　ずないものね。
ゼノン王子はこの間うちの国に来ていたし、きっとその時に小耳に挟んだりでもしたのよ。
きっとそうよ、そうに違いないわ。

「そのような名前をあなたの口から聞くとは思いませんでした。我が国にいらっしゃったとき　に、お耳を汚すような話でもお聞きになったのでしょうか」
「いいえ、……『炎のセレン姫』は私の学友の間では有名でしたよ」
学友と言う言葉に、私は記憶の糸を手繰り寄せた。
「確かキイナ国に留学をしていたと記憶しております。その時のご友人たちですか？」
「ええ、そうです」

さらりと肯定したゼノン王子の言葉に、私は一瞬めまいを感じた。
キイナ国は先ほどの話題にも出たが、大国の名前で、うちのアルゴン国とは比べるのもおこがましいほどの大きな国だ。
その国は国土も経済力も大きく、長い歴史も持っている。
クゥ達の国タンタル国を含めたここら辺り一帯の国はその昔、属国であったため、過去にはキイナ国王に各国の姫が嫁いだり、王太子が留学と言う名の人質でキイナ国に集められていた。
まあ、今ではキイナ国周辺の国は独立するか完全にキイナ国に吸収されて、国の一部となっているのだけれどね。
しかし、キイナ国が嫁や留学生を要求しなくなっても、大国であるキイナ国に嫁ごうともくろむ姫は多いし、キイナ国とお近づきになろうと自主的に留学する国も多いのよ。
まあ、大きな国なだけあって学校もそろっているし、今までの歴史から留学生の受け入れノウハウも整っているっていうのもあるのだろうけれど。

で、まあ、何が言いたいかと言うと、ゼノン王子の学友と言うのはきっと各国からキイナ国に　留学していた王族やら貴族やらなわけで、その方々が自国に私の噂を広げている可能性があると　……。

うーそーでーしょっ！

うわー、私の噂なんてどうせろくでもないものな気がする。
くそじじいに顔が似ていて可愛くないとか、女の癖に生意気だとか。

「私など、噂になるほどではない取るに足らないものですのに」
「ご謙遜を……その美貌もさることながら、『アルゴン国初の女王』になるのではないかと噂されていましたよ」

は？
女王？

男だったならば、王になったかもしれないと陰で囁かれていたのは知ってるけれど、女王になるって……なんだか噂に尾ひれがついて大きくなってる！
王女って絶対なれないし、なる気もないわよ。

心の中で盛大に突っ込みを入れている私にゼノン王子は続けて言葉をつむいだ。
「炎のセレン姫にとって我が国は嫁ぐ価値のある国なのでしょうか？」
彼が私からどのような言葉を導き出したいのかは分からない。
だから、うかつに返事はできない。
ここは、あいまいに言葉を濁した方がいいのかもしれない。

「何が価値があるかは私が決める事です」
けれど、私の口から出たのは思った以上に冷たい声だった。

「私にとってこの国は……」
美しい思い出の地。
とても価値のある国なのよ。

「私がこの国に嫁ぐのはそんなに不自然でしょうか？」
私はゼノン王子を見つめた。
彼とバチリと視線が合ったけれど、決して私はそらさない。
「あなたは私を歓迎していないようですが、もう遅いのです。どうしても嫌なら、もっと早く　動かなければならなかった」
一番初め、結婚を申し込まれた段階で、すでに拒否をすることは

難しかったかもしれない。
けれど、どうしても私をこの国に入れたくないのなら、そこで断らなければいけなかったのよ　。
「それに、あなたは私の結婚相手と言う役から降りてしまった。しかももう、王位継承者でも　ない」
そんな彼にこの結婚をとやかく言われる筋合いはない。
「あなたは自ら私をどうにかする権利を捨ててしまったのです」
私は相変わらず視線をそらさず、とっておきのお姫様スマイルを浮かべた。
「あなたはそこで指をくわえて事の成り行きを見ていてください」
一瞬にして二人の間の空気が凍った。

本当の事を言われて怒っているのですか？

近々お義理兄様（にいさま）になる人に喧嘩売っちゃいました☆
えへっ☆

……なんて、星印までつけて、心の中でおどけてみてもこのピリピリとした空気が緩和されるわけでもない。
まあ、売ってしまったものはしょうがないわ。
どうせこの先長い付き合いになるのだからきっといつかは彼とぶつかる運命だったのよ。
それなら、『タンタル国のセレン王妃』より『アルゴン国のセレン姫』の方が相手が手を出し　辛い分こちらが有利なはずよ。
まあ、彼の場合ありえないと思うけれど、もし暴力でも振るわれた場合……『アルゴン国のセ　レン姫』を傷つけた場合、国際問題にしてあげるわ。
王妃になってからは簡単に実家が口出しを出来なくなるでしょうけれど、今なら介入し放題。
ただでさえタンタル国は今回の婚姻の事で非難される立場にあるのだからちょっとでも問題が　起きれば難癖つけて追い込みを掛けてあげる。
不穏分子の芽は潰しておく……いえいえ、少々牽制してもなんら問題はないはずよね。
私は凍りついた空気の中、口を開く。

「本当の事を言われて怒っているのですか？」

さらに喧嘩を売ってみた。
さて、どう出るかしら。

それまで、真剣な表情で私を見ていたゼノン王子がフッと表情を崩したかと思うと、にこりと　……いや、にやりと笑った。
どす黒いオーラが全身からあふれ出ているのが見えるような気がする。
気のせいか背筋がゾクゾクとして、手のひらに嫌な汗がじんわりとにじみ出てきた。
私の今まで培ってきた勘が危険を告げている。

あなたはどこの大魔王よ！

しかし、ここで負けてなるものか！

ふふふ、この程度の事では私はひるまないわよ。
気を抜けば今にも逃げ出したくなる両足にぐっと力を入れ私はその場に踏みとどまった。
これでも生まれたときから伏魔殿の後宮で過ごしてきたんだから。
こんな簡単に人を威圧できるなんてさすがだけれど、私は威圧されただけで引っ込むような柔　なお姫様じゃないんだからね！
正面から受けてたつわよ！

そうして、見つめあうこと数秒。

「君、なかなか面白いね～」

「はい？」

このゼノン王子の言葉で周りの空気は一瞬にして和らいだ。
ピリピリした空気はまだ少し残っているものの、あのどす黒い雰囲気は一気にひっこめられた　。

何？何なの？？

「クロムとはもう話した？」

なんだかゼノン王子の口調が軽くなっている。

「いいえ、まだ……」

彼の切り替えについていけず、少ししどろもどろで答える私。

こんなんじゃいけないわ。

もっとシャキッとしなくちゃ。

「明日、あいつに時間を作らせるから部屋で待ってて」

「え、あ、はい」

あの、わけが分からないのですが？

ゼノン王子、さっきまで怒ってたわよね？

その後、何事もなかったかのように私は無事部屋まで送り届けてもらった。

なんだか、相手のペースに乗せられた感があるのは気のせいかしら？

遅い

今日、私は朝からずっと部屋でおとなしくしていた。

『明日、あいつに時間を作らせるから部屋で待ってて』

と言うゼノン王子の言葉を胸に、部屋から一歩も出ず、じっと椅子に座って……。

今朝、私は昨日の昼食会に負けず劣らず私は気合を入れて身支度をした。

クゥと会うんだから少しでも綺麗な私を見てほしい。

本当はシルバー姫のような美しさを持っていればいいのだけれど、残念ながら私は『かわいい』お姫様ではないのだからしょうがない。

だいたい、物語の中のシルバー姫は少女と言って良いぐらいの年齢の子のはずだから、もう大人の私は『かわいい』は無理なのよ。

……そ、そんな事よりも、クゥと会ったら何を話そうかしら。

私の心はそわそわと落ち着かない。

8年前のことには触れてほしいようなほしくないような……。

クゥはやっぱり今でも私みたいな姫よりシルバー姫みたいな女の子と結婚したいのかしら。

うう、どうしよう。クゥに本当結婚したくないけれど仕方なく結婚するんだとか言われたら！

恋愛対象に見られなくても、せめて、出来る事なら昔のように……友達だったころのような関係になれたら良いのだけれど。

クゥとのこれからの事を考えて考えて、長い長い待ち時間が蝸牛の歩みのような速さで過ぎていった。

そして……

「遅い」

窓の外の夕焼けを見ながら私はポツリと呟いた。

まさか朝一で会いに来てくれるなんてことは思っていなかったが、せめて午後までには先触れがあると思っていたのに、何の音沙汰もないまま正午はとっくに過ぎ日が傾きだしている。

くっ、ゼノン王子め約束を違えるつもり？

今日の朝からの私の苦悩の時間を返せ！

人の心を弄んで！許さないわよゼノン王子。

私がありとあらゆる復讐の方法を考えていると、控えめに部屋の戸がノックされた。

「セレン様。クロム殿下がいらっしゃいました」

テルーの言葉に私は思わず椅子から飛び上がった。

「ようこそいらっしゃいました」
私はその音が部屋中に響き渡るんじゃないかと言うほど心臓をバクバクさせながらクゥを迎え入れた。
でも、もちろん相手にはそんな事気が付かれたりしないように平静を装っている。
私の動揺はちっともクゥにばれていない……はず。

スラスラと流れるようなクゥの挨拶。
本当はちゃんと聞かなくちゃいけないのだけれど、今の私はそれどころじゃない。
夢にまで見たクゥが目の前にいるのよ。

きゃ～どうしましょう！

いや、まあ、実際はどうにもしないのだけれど、出来る事なら昔みたいに飛びついて抱きしめて頬にキスをしたい。

それから、それから……

はっ！いけないいけない。　妄想に浸ってちょっと理性が飛びそうだったわ。
ちゃんと話を聞かなくちゃ。

「……と、いう訳で式は今日から一週間後に決まりました」

「はい、了解いたしました」　いつの間にか挨拶から式の話に変わっていた。
後で後ろに控えているリンに話の内容を確認しておかなくちゃ。

それにしても、クゥを近くで見ると結構昔の面影が残っているか

も。

あ、でも、しゃべり方とか昔とだいぶ違うわね。

「……では、私はこれで失礼します」

「はい」

クゥに見惚れていて話を聞いていなかったけれど、私はとりあえず返事をしたのだけれど、直後私はすぐに後悔した。

目の前にいたクゥが一礼するとスタスタと歩いて部屋から出て行ってしまったのだ。

部屋の戸がパタンと閉まる音を聞いて私はわれにかえった。

あれ？

クゥ帰っちゃった？

うわあああああああああああああああああああ

せっかくのお話しするチャンスだったのにぃ。

私のバカバカバカ！

あ、でも、最後の一礼はちょっと決まっててかっこよかったかも。

って、そんな事思っている場合じゃなーーい！

どうしよう、今から追いかけて引き止めようかしら。

ちょっとお茶でもしませんかとか適当な理由をつけて……。

いいえ、そんな回りくどい事をいわずここは親睦を深めるために

お話を……ええい、そんなことより何よりまずはクゥを引き止めなきゃ！

私はあわててクゥを追いかけようとドアに飛びついたのだけれど、まさに私がドアを開けようとしたその瞬間――

ガツンッ

ドアが開いて私の顔面に直撃した。

「きゃー！セレン様大丈夫ですか！？」

ドアを開いたのはテルーだった。

「セレン様、申し訳ありません」

顔面蒼白になって土下座する勢いでテルーは謝ってくる。

そんなテルーをどけてリンが痛みにうずくまっている私の顔を覗き込んできた。

「テルー、ドアを開けるときは必ずノックをするようにと教えたでしょう。姫様大丈夫ですか？」

痛い、あまり大丈夫じゃない。

でも、それどころじゃないのよ！

「大丈夫です。それよりク」

ぽたり

なにやら水っぽいものが私の足元に落ちてきた。

はて？何かしら？

「あああああ！セレン様鼻血！鼻血が！」

「テルー、そのように騒いではいけませんよ。姫様、とりあえずこれで鼻を押さえてください」
私はリンに差し出されたハンカチを受け取ると慌てて鼻を押さえた。

うう、鼻血だなんて、こんな間抜けな姿クゥに見せられない。
ああ、せっかく、せっかく、せっかくのクゥとお話しするチャンスだったのに。
私はちょっぴり泣きたくなった。

ごきげんいかがです？

結婚式の日取りが決まったらしい。
後六日後には式らしい。
当初の予定よりいささかズレはあるものの、ほぼ予定通りに事を進めるらしい。
まあ、式を挙げるのなら参列客なんかを他国から呼んじゃっているわけだからあんまり大きく変えることはできないのよね。
私とゼノン王子の式に出る予定で御呼ばれした近隣諸国の皆々様はもうこの国きちゃっているだろうし。
客人としてこの王宮に滞在している人とかもいるはず。

で、今現在私は王妃様主催のお花見に出席している。
このお花見、御呼ばれしたのは私の式に呼ばれている女性のお客様とこの国の貴族の淑女やお嬢様方。
これってあれよね、早めに現地入りしたお客様を退屈させず息抜きをさせ、なおかつ人々の交　流の場をもって有意義な時間を過ごせるようにというホスト国としての御もてなし。
将来私もこういうことをしなくちゃいけないんだろうなぁ。
王妃様の様子を今のうちにしっかり見て勉強しておこう。

会場は王宮の中庭の一角で庭には庭師の方々が丹精こめて世話をしているのだろう花々が見事　に咲き誇っていて、いくつかの椅子やお菓子や飲み物なんかがまとめられたテーブルが用意され　て入るけれど、基本立食パーティーのようになっている。
お花を愛でながらお茶をして女同士の親交を深めましょうと言うわけなのよね。
あっちこっちでグループが出来ていて、わいわいオホホホホと話

に花を咲かせている。
私はそんな様子の会場を一通り見渡した。
私が気になるのか何人かがちらちらと視線を送ってくる。
ついさっきまでお話していた王妃様が所要で席を外されたので一人になってしまったのだけれど、積極的に話しかけてくる人はまだいない。

さて、どうしようかしら。
実は私、この中に知り合いは一人としていない。
ここに居るのが殆どはこの国の貴族の女性とこの近隣の国の使節の人々。
私も自国の近隣の国の重鎮とかだったら顔見知りや知り合いが居るのだけれど、さすがにこっちの方の人にはあまり面識がない。
せっかくだからいろいろな人と知り合いになっておこうかしらと、私はいろいろなグループを渡り歩いてみる事にした。

私はそれから有意義な時間を過ごしていた。
なるべくいろいろな人と話すようにしたから、今まで名前しか知らなかったような人たちとも知り合いになれたし、久々に言葉遊びが出来て楽しかったわ。
それにしても皆、私の結婚相手が急に変わった事に興味津々で話題は殆どがその事ばかり。
いろいろ探りを入れられるけれど、あまり話せることはないのよねー。
次は誰と話してみようかしらとうろうろしていると、サマリ嬢の姿を見つけた。
今まで気がつかなかったけれど、彼女もこの会に来ていたのね。
彼女は庭の端っこの方で私たちと同じ年頃の5，6人の女性たち

と話をしているようだ。
でも、気のせいか彼女の顔色はこの間の食事会のときのように悪く、硬くこわばっているよう　に見える。
お友達と仲良く歓談しているわけではなさそうね。
私はそっと彼女たちに近づいていてみることにした。

「ほほえましいですわねその格好。子どもが精一杯大人のふりをしているようで」
「本当ですわ。サマリ様はいつも、かわいらし～くしていらっしゃったから、今日の格好は……ふふふ」
「もう少し体のラインが大人っぽくあれば……失礼、おうとつの少ない体もサマリ様らしくて可愛いですわよ。ホホホホホ」

おお、これはあれね、よくある女同士の嫌味の応戦合戦ね。
いや、ちょっと違うかな。
私だったらこんなことを言われたら嫌味の一つや二つや三つや四つ返すんだけれどサマリ嬢は口を固く結んだまま俯いている。
あえて何も言い返さず相手を無視すると言う応戦方法もあるけれど、彼女の場合、ただ単に言い返せないだけみたい。
ぜんぜん合戦になっていないわ。

今日のサマリ嬢の格好は、フリルやレースのたくさんついたドレスではなく、首周りが開いていて、胸や腰周りのラインが綺麗に見えるシンプルなデザインのものだ。
前に会った時よりも彼女を大人っぽく見せている。

決して似合っていないわけじゃないし、このドレスを誰が選んだかは知らないけれど、センスは悪くない。
貶されるようなものじゃないんだから、堂々と胸をはっていればいいのに。

「ご自身の体のことをもっとお知りになったほうがよろしいんではなくて？」

サマリ嬢を取り囲んで彼女たちはくすくすと笑っている。

「まあ、サマリ様が身の程知らずなのは昔からですものね」
「そうそう、特にゼノン様との事など……」
「セレン姫様ならまだしも、あなたなんかがゼノン様と釣り合うとお思いになって？」

「あなたにはクロム殿下で我慢していらしていればよかったのに」

この言葉に私はぴくりと眉を引きつらせた。
は？
クゥで我慢ですって？
クゥは我慢して結婚するような相手だって言うの！
ちょっと！この女、クゥを侮辱したわね。
許すまじ！
私の心に怒りの炎がボッと燃えた。

別にサマリ嬢に嫌味を言ったり突っかかったりするのはどうでも良いわ。

止めないし、喧嘩でも何でも好きにやってちょうだい。
でもね、クゥを侮辱する事は許さないんだから！

「サマリ様ごきげんいかがです？」

私は優雅に愚者たちの輪の中に突入した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6141u/

セレン姫の結婚

2011年7月10日22時22分発行